

茨城県西茨城郡友部町

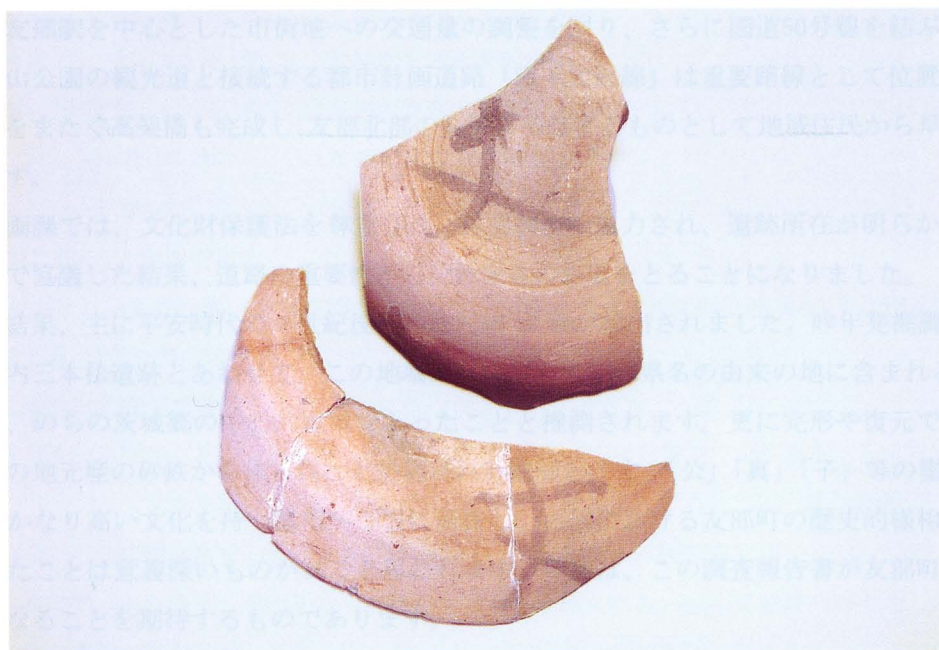
北平遺跡発掘調査 報告書

平成16年3月

友部町北平遺跡発掘調査会

茨城県西茨城郡友部町

北平遺跡発掘調査 報告書



平成 16 年 3 月

友部町北平遺跡発掘調査会

序

友部町は、北及び西部の友部丘陵を流れる涸沼前川と南部の東茨城台地に枝折川、涸沼川があり、その周辺の豊かな自然一帯は、原始・古代から拓かれてきました。これは多くの遺跡が点在していることからわかります。

一方この台地と平地は、近代に入って早々 J R 水戸線や常磐線が開通し、いくつもの国道・地方道が走り更に近年北関東自動車道の友部インターチェンジが開設される等、交通要衝の地として、望ましい都市基盤の形成が町の課題となっています。

そこで、友部町では新たな街づくりの将来像として「ふれあいと活力のある地方都市ともべ」を設定し、その実現のため住民自らの参画を求める「友部学」を展開しているところであります。その目標の一つとして町内の都市計画道の整備を進めていますが、同時にこの事業を進めるにあたり、住民からの心豊かでうるおいのある暮らしへの期待もあり、自然と良好な環境の保全とあわせて、原始・古代の埋蔵文化財保護の調整を図ることも重要であると思えます。埋蔵文化財の保護では、開発計画に先だち極力文化財をさけながら調整されることを望みますが、道路の場合、その重要性や機能上、どうしてもさけられない場合は、記録保存の処置をとらざるを得ないものも出てまいります。

今回、友部駅を中心とした市街地への交通量の調整を図り、さらに国道50号線を結ぶ町道1級1号線及び北山公園の観光道と接続する都市計画道路「宿・大沢線」は重要路線として位置づけされ、すでに鉄道をまたぐ高架橋も完成し、友部北部の振興に寄与するものとして地域住民から早期完成が望まれています。

都市計画課では、文化財保護法を尊重され、確認調査に協力され、遺跡所在が明らかとなったことから両者で協議した結果、道路の重要性から記録保存の処置をとることになりました。

調査の結果、主に平安時代の9世紀後半の住居跡12軒が検出されました。昨年発掘調査が行なわれた小原地内三本松遺跡とあわせて、この地域が「いばらき」の県名の由来の地に含まれると推定され、旧茨城国、のちの茨城郷の中心的地域であったことと推測されます。更に完形や復元できる土器、南友部地区の地元産の砂鉄から作られたと推測される鉄器と「丈」「公」「真」「子」等の墨書土器の出土等から、かなり高い文化を持つ集落がここに所在し、古代における友部町の歴史的様相の一端が明らかになったことは意義深いものがあると思われます。今後は、この調査報告書が友部町の古代史解明の一助となることを期待するものであります。

最後に調査にあられました関係者の方々や御協力をいただいた都市計画課及び御指導をいただいた県教育庁文化課の方々に衷心より感謝を申し上げ序文といたします。

平成16年3月

北平遺跡発掘調査会会長
友部町教育委員会教育長

坂 倉 弘 國

例 言

1. 本書は、平成15年11月に実施した道路建設（都市計画道3・4・8宿・大沢線）に伴う記録保存のための北平遺跡発掘調査報告書である。

2. 調査のため、友部町教育委員会は、北平遺跡発掘調査会を設けて実施した。

3. 発掘調査会の組織は下記のとおりである。

会 長	板 倉 弘 國	(友部町教育委員会教育長)
副会長	白 田 清 郎	(友部町文化財保護審議会会長)
理 事	深 谷 忠	(友部町文化財保護審議会委員)
	友 部 平 重 郎	(友部町文化財保護審議会委員)
	寺 内 寛	(友部町文化財保護審議会委員)
	高 野 克 巳	(友部町文化財保護審議会委員)
	桧 山 成 勇	(友部町文化財保護審議会委員)
	南 秀 利	(友部町文化財保護審議会委員)
	羽 部 道 紀	(友部町都市建設部長)
	鈴 木 登	(友部町教育委員会教育次長)
監 事	岡 本 規 雄	(友部町生涯学習課課長)
幹 事	島 田 武 夫	(友部町生涯学習課課長補佐)
	橋 本 祐 一	(友部町生涯学習課主幹)
	深 沢 充	(友部町生涯学習課主幹)

4. 調査団は下記のとおりである。

調 査 主 任	能 島 清 光	(笠間市文化財保護審議会委員、笠間市史編纂及び専門委員)
調 査 員	高 橋 孝 之	
	山 口 憲 一	
調 査 協 力 員	渡 辺 幸 友、正 木 信 行、大 岡 孝 一、齊 藤 幸 一、横 井 義 夫、大 平 敏 正	
	大 平 た ま 子、大 内 ふ み 子、加 藤 友 三 郎、富 田 善 一、白 沢 忠 夫、塩 畑 勝 利	
	佐 藤 八 重 子、高 橋 き み 江、田 辺 伸 子、広 瀬 文 子、鯉 淵 典 子	

5. 調査にあたり、次の方々、諸機関から御指導と御協力を賜わった、記して感謝の意を表したい。

県教育庁文化課、鯉淵和彦、後藤一成、皆川修、荒井保雄、芳賀友博、寺内久永、友部町立歴史民俗資料館

6. 本書の編集・作成は、住居跡や遺構の製図、遺物の観察及び考察は、高橋、山口調査員が、土器の復元、実測、作図は、高橋きみ江、田辺伸子、広瀬文子、鯉淵典子が行い、その他は、能島清光が担当した。

7. 調査にあたり、発掘調査区域外の地主深谷芳雄、大平敏正、橋本祐一氏に、整理作業では、友部町立歴史民俗資料館藤井協氏に特段の御協力をいただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

凡 例

1 遺構・土層・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構	住居跡－S I	溝跡－S D	道路跡－S F	不明遺構－S X	ピット－P
遺物	土器－P	土製品－D P	石製品－Q	金属製品－M	
土層	攪乱－K				





2 土層観察と遺物における色調の判定は、『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社）を使用した。

3 遺構・遺物実測図の掲載方法については、次のとおりである。

(1) 遺構全体図は700分の1、各遺構の実測図は60分の1に縮尺して掲載した。遺構全体図中の調査地区()内の名称は、小字名である。

(2) 遺物の実測図は3分の1の縮尺で掲載した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は次のとおりである。

	焼土		竈材・粘土		黒色処理		煤・土器断面		
●	土器	○	土製品	□	石製品	△	金属製品	- - - -	硬化面

4 遺物観察表の作成方法については、次のとおりである。

(1) 計測値の()内の数値は既存値を、[]内の数値は推定値を示した。法量についてはcm、重量についてはgで示した。

5 「主軸」は竈を持つ堅穴住居跡については竈を通る軸線とし、他の遺構については長軸(径)を主軸とみなした。「主軸・長軸方向」は主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。

目 次

序	
例 言	
凡 例	
目 次	
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 遺跡の位置と環境	2
第3節 調査の経過	3
第2章 調査の成果	8
第1節 遺跡の概要	8
第2節 遺構と遺物	8
(1) 竪穴住居跡	
第1号住居跡	8
第2号住居跡	12
第3号住居跡	14
第4号住居跡	17
第5号住居跡	19
第6号住居跡	21
第7号住居跡	25
第8号住居跡	27
第9号住居跡	30
第10号住居跡	31
第11号住居跡	32
第12号住居跡	33
(2) 道路跡と溝跡	34
(3) 不明遺構	35
第3節 調査のまとめ	36
付章1 「宿」の集落と伝承について	38
2 須恵器窯跡について	39
写真図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	都市計画道宿・大沢線	1	第16図	第6号住居跡出土遺物実測図(1)	23
第2図	北平遺跡の位置図	2	第17図	第6号住居跡出土遺物実測図(2)	24
第3図	北平遺跡全体図	7	第18図	第7号住居跡実測図	26
第4図	第1号住居跡実測図	9	第19図	第7号住居跡出土遺物実測図	27
第5図	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	10	第20図	第8号住居跡実測図	28
第6図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)	11	第21図	第8号住居跡出土遺物実測図	29
第7図	第2号住居跡実測図	13	第22図	第9号住居跡実測図	30
第8図	第2号住居跡出土遺物実測図	14	第23図	第10号住居跡実測図	31
第9図	第3号住居跡実測図	15	第24図	第10号住居跡出土遺物実測図	32
第10図	第3号住居跡出土遺物実測図	16	第25図	第11号住居跡・第12号住居跡実測図	33
第11図	第4号住居跡実測図	18	第26図	第1号道路跡・第1号溝跡実測図	34
第12図	第4号住居跡出土遺物実測図	18	第27図	不明遺構実測図	35
第13図	第5号住居跡実測図	20	第28図	北平遺跡と「宿」集落位置図	38
第14図	第5号住居跡出土遺物実測図	21	第29図	北平遺跡と須恵器窯跡位置図	39
第15図	第6号住居跡実測図	22			

図 版 目 次

図版1	第1号住居跡完掘・遺物出土状況・竈完掘状況
図版2	第2号住居跡・第10号住居跡完掘状況、第2号住居跡完掘状況、第3号住居跡遺物出土状況
図版3	第3号住居跡完掘状況・竈遺物出土状況、第5号住居跡完掘状況
図版4	第5号住居跡竈完掘状況、第6号住居跡完掘状況・竈完掘状況
図版5	第6号住居跡遺物出土状況、鉄斧出土状況、第7号住居跡炭化材遺物出土状況
図版6	第7号住居跡竈遺物出土状況・完掘状況、第8号住居跡遺物出土状況
図版7	第8号住居跡完掘状況・竈完掘状況、第9号住居跡完掘状況
図版8	第10号住居跡完掘状況、第11号住居跡・第12号住居跡完掘状況、第1号溝跡土層断面図
図版9	第1号住居跡出土遺物
図版10	第1号住居跡・第2号住居跡・第3号住居跡出土遺物
図版11	第4号住居跡・第5号住居跡出土遺物
図版12	第6号住居跡出土遺物(1)
図版13	第6号住居跡出土遺物(2)
図版14	第7号住居跡・第8号住居跡出土遺物
図版15	第1号住居跡・第3号住居跡・第6号住居跡・第8号住居跡出土遺物
図版16	第1号住居跡・第2号住居跡・第3号住居跡・第6号住居跡出土遺物

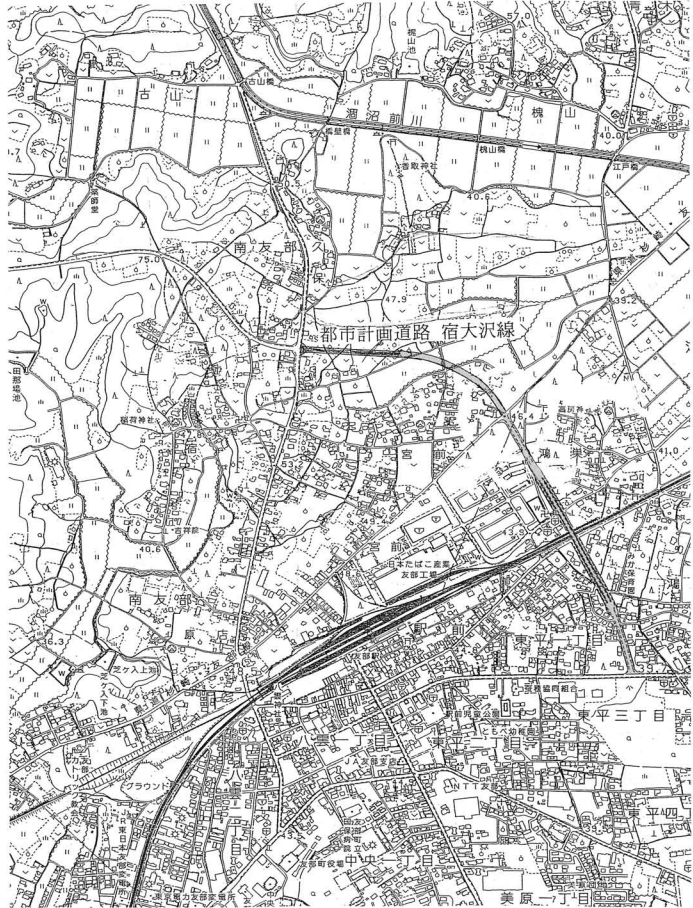
第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

友部町では、「ふれあいと活力のある地方都市」の実現のため、町内の都市計画道の整備をすすめている。その一つ「宿・大沢線」は、友部駅を中心とした市街地への交通量の調整を図り、さらに国道50号線を結ぶ町道1級1号線及び北山公園の観光道と接続する重要路線として位置づけされ、近年鉄道をまたぐ高架橋も完成し、早期完成が望まれている。

都市計画課から、工事に先だち、平成15年7月10日付で、路線内の埋蔵文化財の所在の有無と取扱いについて、教育委員会に照会があった。そこで、7月18日に現地調査を実施した。周辺は、No.28北平遺跡が隣接する丘陵地で、以前は栗畑であったが、栗林が伐採後雑地となったことから表面観察が可能となっていた。計画路線の町道1級1号線が交差する地点から南東水田に至る330mを踏査すると、土師器、須恵器の土器片の散布がみられ、教育委員会は、7月24日付で試掘

による確認調査が必要であり、調査結果によっては、保存処置について協議されたい旨回答した。教育委員会は、試掘調査の要望を受け、10月3日から6日にかけて調査を実施した。A区（小字名登り）B区（小字名北平）C区（小字名前ノ内）を設定し、トレンチ法によって、遺構確認をした。その結果、A区で住居跡2軒と道路跡と溝、B区で住居跡6軒、C区で住居跡1軒と谷状地形が確認され、両者でその取扱いについて協議した結果、道路の重要性や機能上から記録保存の処置をとらざるをえないとの合意に達し、できるだけ早期に調査を実施されたいとの要請をうけて、確認調査に引き続き発掘調査に入ることとなった。



第1図 都市計画道宿・大沢線

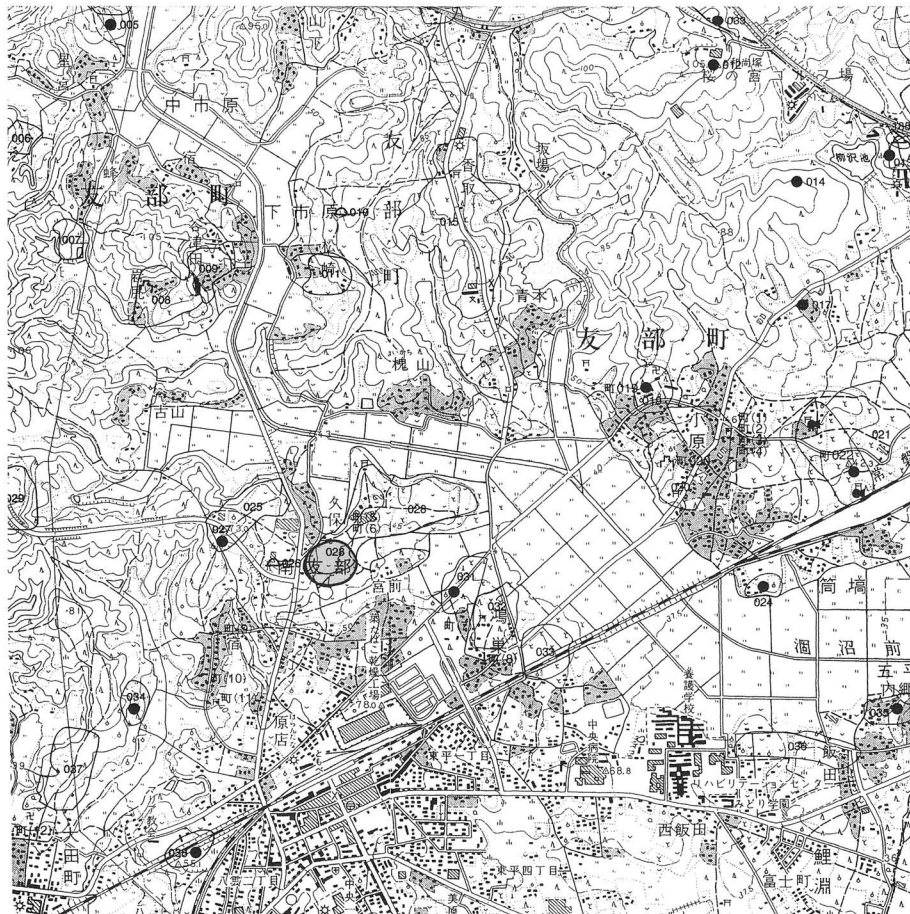
第2節 遺跡の位置と環境

友部町の北西部山間地帯から流出する数条の小河川が東部平垣地に向かって流れ、下流に至って合流して潤沼前川となり、内原町からやがて潤沼川へ注ぐ。

この潤沼前川の流域は水田地帯が拓けていて、南友部の北平遺跡は、この水田地帯より西へ入り込む小規模の谷津田の上に位置する。この地域の水田地帯は幅1km以下と、さほど広くなく、遺跡から北東に対面する台地が小原地内で、小原遺跡、一本松古墳群、高寺古墳群、塚崎古墳等多くの遺跡が点在する。そのうち三本松遺跡が、平成15年1月から3月にかけて発掘調査され、弥生時代から奈良・平安時代に至る遺跡の様相が解明され、「いばらき」の名の由来の地であるとともに、旧茨城国の中心的地域であったことが考古学的に実証された。更に昨年度この周辺の遺跡分布調査によって、遺跡台帳記載の遺跡以外にかなりの遺跡が点在していることがわかり、広範囲に亘って、かなりの規模をもつ集落が展開されていることが推測された。この北平遺跡もその一部であると考えることができる。

当遺跡は、遺跡台帳No.28のこの北平遺跡の広がりの中に含まれ、水田地帯につき出た島状の台地南側標高55.6m～50.0mにあって、確認調査の結果、主に平安時代の遺跡と推定され、小原地内の三本松遺跡のうち奈良・平安時代の遺構との関連が考えられる。

これは、今後比較検討によって奈良・平安時代の友部町の有り様が解明されることが期待されよう。



第2図 北平遺跡の位置図

第3節 調査の経過

平成15年10月3日～5日

- 確認調査を実施する。

10月6日(月)

- 都市計画課に現地で遺構状況の説明と遺跡保存について協議…記録保存で合意(道路幅18m、長さ200m、3600㎡)

10月7日(火)～9日(木)

- 調査計画書作成
- 発掘調査要項の作成と調査協力員募集
- 調査用具・機材・設営等の準備

10月10日(金)

- 北平遺跡発掘調査会の設立



1号住居跡の掘込み開始

10月12日(日)晴

- 設営作業(休憩所設営、用具の搬入)
 - 地鎮と安全祈願
 - 調査方法、執務等の説明
 - 1・2号住居跡の掘込の開始
 - 9号住居跡の精査と実測準備
- 教育委員会 島田補佐 橋本・深沢主幹



7・8号住居跡の発掘

11月13日(木)曇り

- 1・2号住居跡精査…1号住居跡より多くの土器が出土する。
 - 7・8号住居跡の掘込み…7号住居跡炭化材、焼土を検出、8号住居跡より土師器が多く出土する。
 - コンテナ設置
 - 土器洗浄用具・脚立搬入
- 来訪者 都市計画課 部長 課長外1名



3・4・5号住居跡の発掘

11月14日(金)晴

- 3・4・5・6号住居掘込み…重複があつて調査に手間どる。
- 3・5号住居跡から竈検出…二つ竈か、重複住居跡の竈か判断に苦勞する。
- 北側道路幅の拡張…表土を地区外栗畑へ移動
- 4号住居跡床面露出が判明する。
- 1・2号住居跡…エレベーション測量と土器取上げ
- 2・3号住居跡より刀子出土



1号住居跡のベルトセクション実測

11月15日(土)曇り

- 1・2号住居跡ベルトセクション測量
- 7・8号住居跡ベルトセクション測量



大原小学校児童の見学

11月17日(月)晴

- 1・2号住居跡実測
- 3・4・5・6号住居跡精査
- ベルトセクション測量

来訪者 大原小2年生及び教員2名
 桧山理事、都市計画課 課長



7・8号住居跡実測

11月18日(火)晴

- 7・8号住居跡実測…出土土器取上げ
- 1・2号住居跡の竈四分割をする。
- 6号住居跡の実測
- 土器洗浄…墨書土器片を確認する



確認調査により発見された10号住居跡の発掘

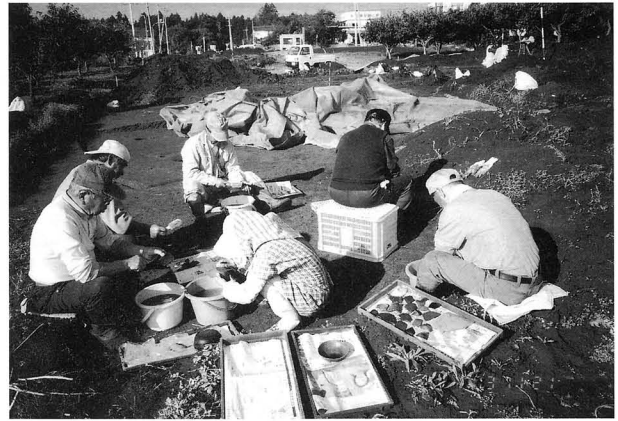
11月19日(水)曇り

- 重機による確認調査を並行して実施する
- A区より10号住居跡を検出する。
- 10号住居跡の掘込み
- B区の全面表土除去をはじめる。

11月21日(金)晴

- 前日雨のため午前中土器洗浄
- 10号住居跡精査
- 3・4号住居跡実測

来訪者 白田調査会副会長 笠間市文化財審議委員3名外1名



現場での土器洗浄

11月22日(土)晴

- 調査指導者5名の協力をえる。
- 1・2・7・10号住居跡竈分割調査



1号住居跡竈実測

11月23日(日)晴

- 調査指導者2名の協力をえる。
- B区表土除去完了…11・12号住居跡痕跡検出
- 4号住居跡カマド分割調査……紡錘車出土
- 1・2・7・8・10号住居跡竈実測完了…完掘
- 3・4・5・6号住居跡竈実測完了…完掘
- 3号住居跡より砥石出土
- 土坑の発掘…出土品なく不明



土坑の発掘

11月24日(月)曇り

- 各住居跡の床面・竈の実測
- 11・12号住居跡の実測
- C区の重機による確認調査……遺構はない。
- C区の溝状遺構の表土除去……遺構ではなく谷状地形を確認する。
- A区の溝の精査



11・12号住居跡柱穴発掘



溝の発掘

11月27日(木)晴

- 各住居跡の実測の補足
- A・C区溝…谷状地形のセクションと実測
- 土器洗浄…竈出土品
- 午後 設営場所の片付けと用具の搬出
- 発掘調査を終了する。



現地説明

11月28日(金)晴

- 文化課…発掘現場の調査終了の確認

現地説明

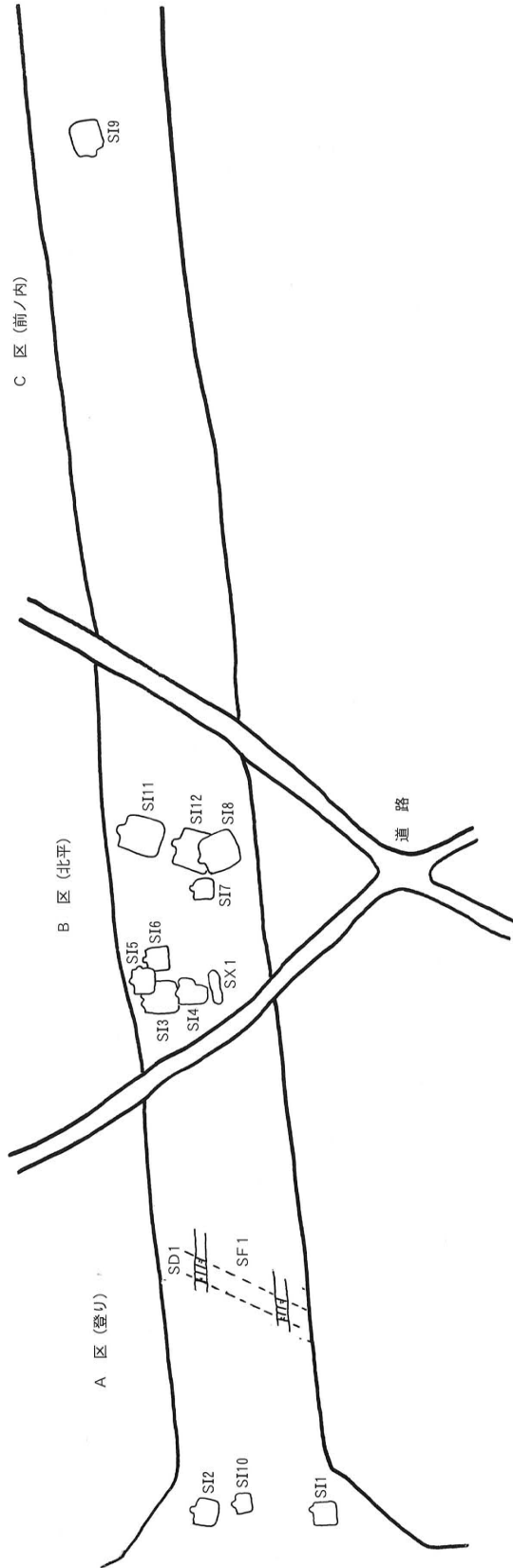
来訪者 文化課 松浦文化財保護主事

水戸教育事務所 川崎埋文指導員

町教育委員会 生涯学習課職員



B調査区 完掘状況



第3図 北平遺跡全体図

第2章 調査の成果

第1節 遺跡の概要

北平遺跡は、今回の調査によって、古墳時代から奈良・平安時代にかけての遺跡であることが判明した。遺構としては、竪穴住居跡12軒（奈良・平安時代12）、道路跡1条、溝跡1条、性格不明の土坑1基が確認された。主な出土遺物としては、土師器（坏、甕、甑）、須恵器（坏、盤）、石製品（砥石）、鉄製品（刀子、鉄斧、鎌）、土製品（支脚）などである。

第2節 遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

第1号住居跡（第4～6図）

位置 A区西側に位置する。

規模と形状 東西3.65m、南北3.38mの方形である。主軸方向はN-10°-Eである。壁はほぼ直立して立ち上がっている。壁高は35cm～40cmである。

床 ほぼ平坦で、床面中央部から西側にかけてよく踏み固められている。壁溝が周回している。

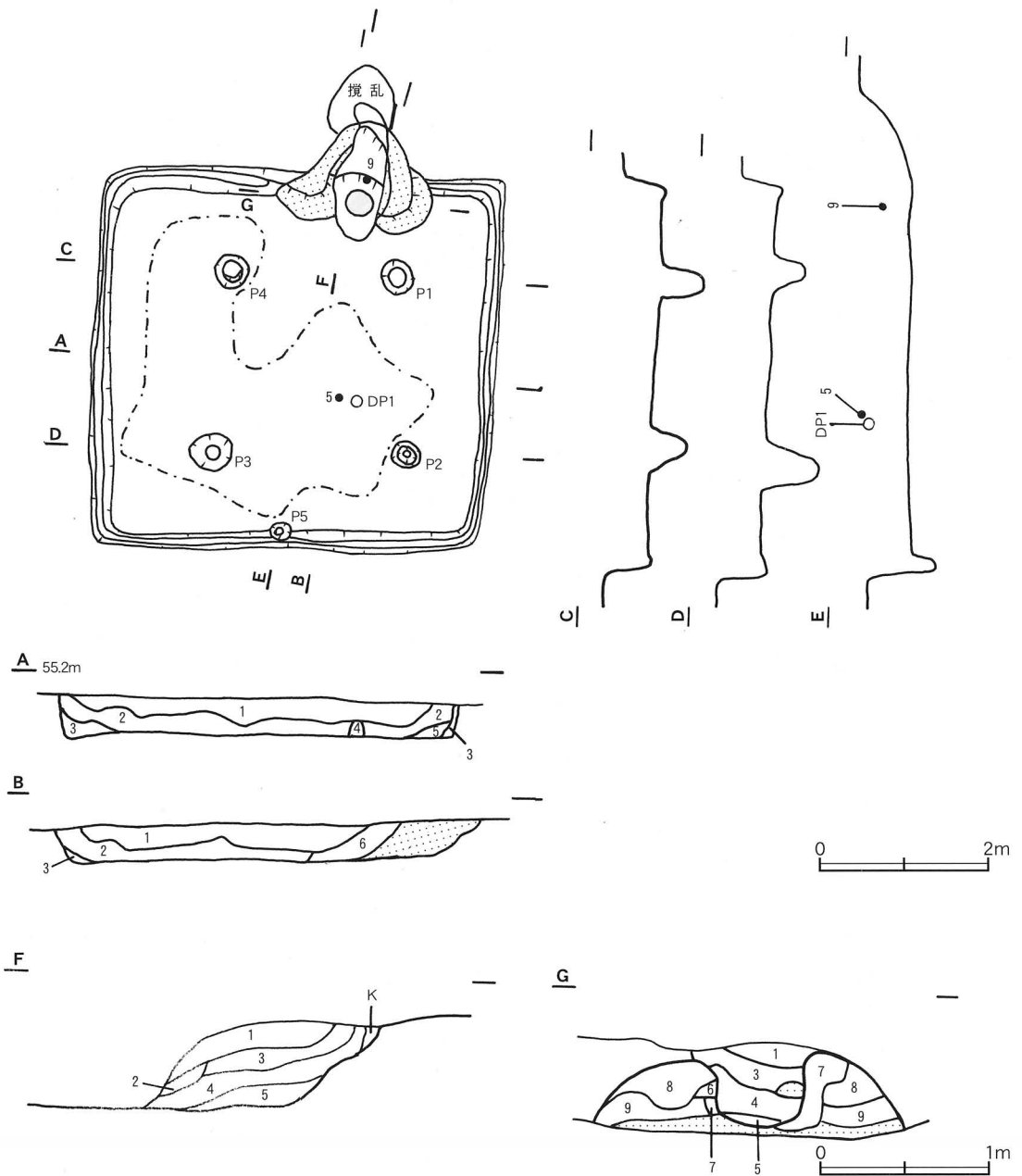
ピット 5ヶ所。P1～P4は径25～40cm、深さ27cm～48cmで、いずれも支柱穴と考えられる。P5は径20cm、深さ23cmであり、南壁際中央部に位置し、竈に対峙することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁際東寄りに付設されている。壁外へ50cmほど掘り込まれている。規模は、焚口から煙道まで約110cm、両袖部幅約135cmである。砂質粘土で構築されている。火床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。全体的に暗褐色土で、土の粒子はローム、炭化物、微量の焼土を含み、締りが無い。下層はレンズ状の堆積状態を示した自然堆積、上層はブロック状の堆積状態を示した人為堆積である。

遺物 土師器片286点（坏4、埴1、甕281）、須恵器片64点（坏38・高台付坏1・高盤1・甕21・蓋3）灰釉陶器片1点、土製品2点（支脚）、鉄製品1点（鎌）が出土している。第5図5とDP1は中央部の覆土上層から出土している。竈の火床面からは、9が正位で出土している。中央部の覆土上層から、土師器片・須恵器片がまとまって出土している。覆土上層が人為堆積であることから、これらの土器片は、住居廃絶後に投棄されたものと推測される。

所見 時期は、出土した土器から9世紀前葉と考えられる。



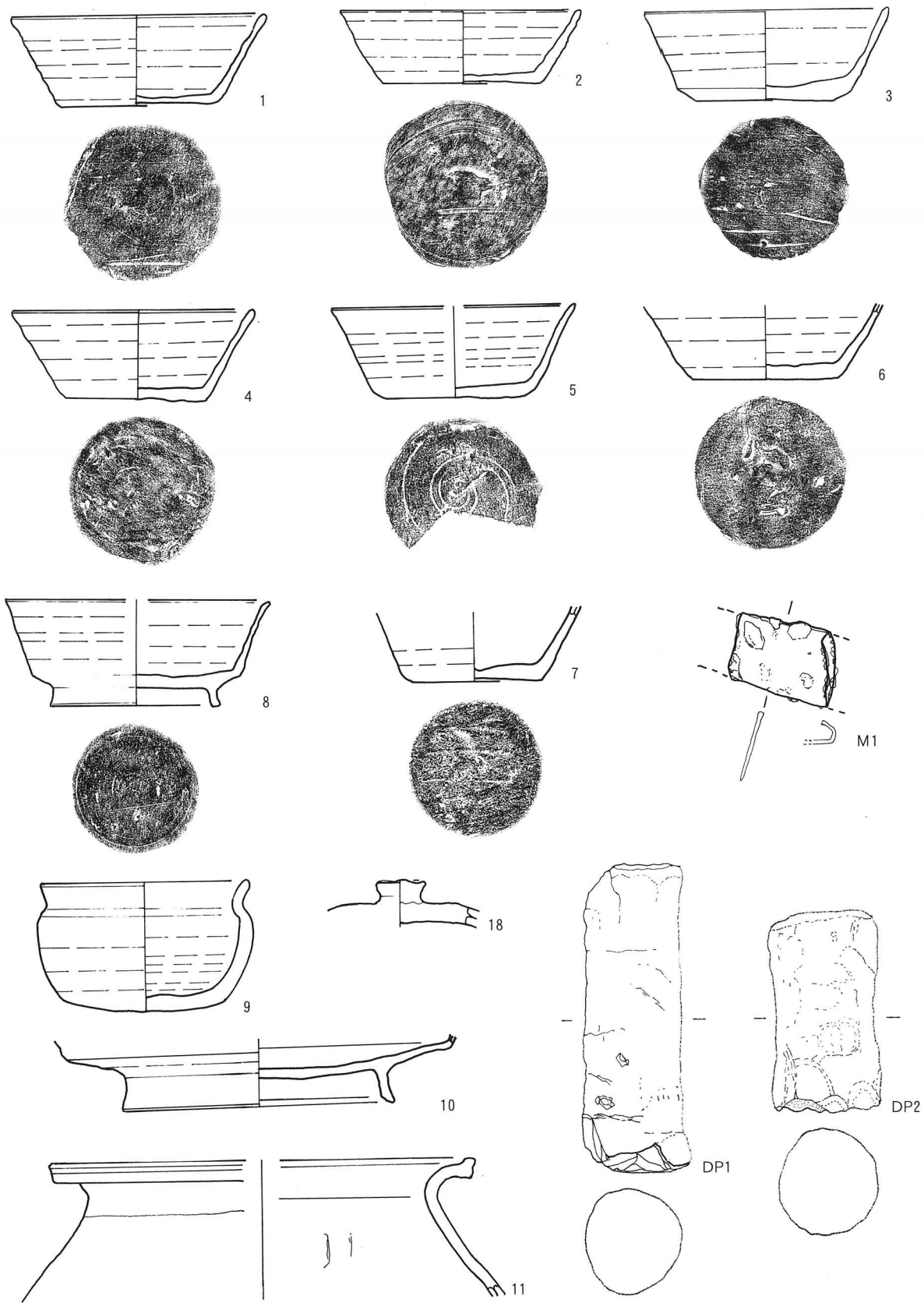
第4図 第1号住居跡実測図

S I - 1 土層解説

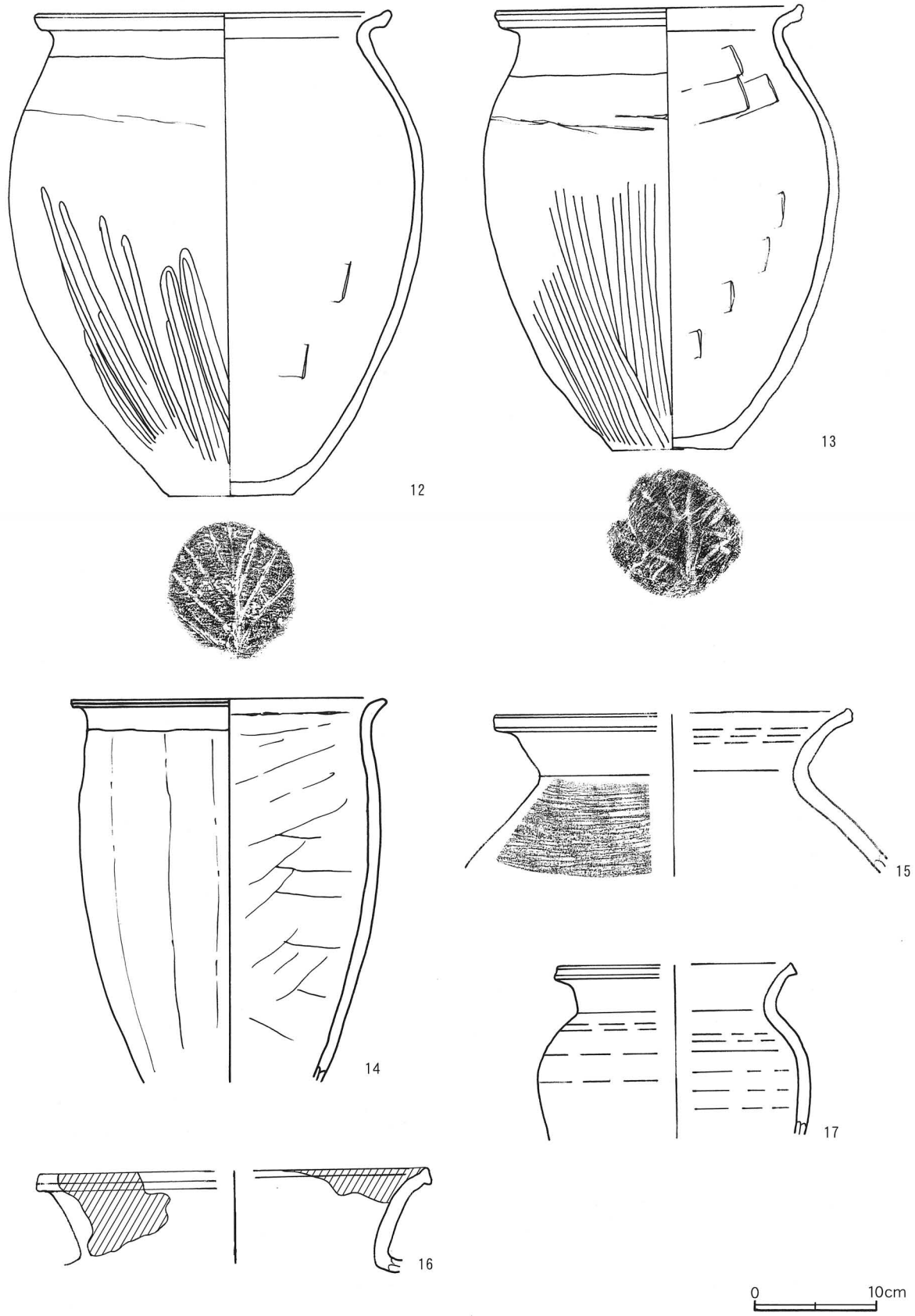
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化物少量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 6 暗褐色 ローム粒子・小ブロック少量、焼土粒子微量、炭化粒子少量

竈土層解説

- 1 にい赤褐色 ローム粒子・小ブロック中量、焼土粒子・小ブロック少量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子中量、焼土小ブロック少量、炭化物微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子・ブロック・炭化粒子少量
- 4 暗赤褐色 ロームブロック微量、焼土粒子中量、焼土小ブロック・炭化粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・ブロック中量、炭化物微量
- 6 赤褐色 焼土ブロック多量
- 7 暗赤褐色 焼土粒子・ブロック中量、炭化粒子・粘土粒子少量
- 8 黄褐色 焼土ブロック微量、粘土粒子多量
- 9 褐色 ローム粒子多量、焼土粒子少量、炭化粒子微量



第5図 第1号住居跡出土遺物実測図(1)



第6图 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

第1号住居跡出土遺物観察表

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	須恵器	坏	13.9	4.9	8.1	長石・雲母・石英	灰白	普通	底部回転糸切り後、ヘラ削り	P1 70%・口縁部に自然釉
2	須恵器	坏	13.2	4.0	8.6	長石・雲母	黄灰	普通	底部回転糸切り後、ヘラ削り	P2 95%・口縁部に自然釉
3	須恵器	坏	13.4	5.1	7.5	長石・砂粒・黒色粒子	黄灰	良好	体部外面ロクロナデ・底部静止ヘラ切り	P3 75%
4	須恵器	坏	13.2	5.0	7.6	長石・雲母・砂粒	黄灰	普通	底部回転糸切り後、ナデ	P4 100%・体部の一部に自然釉
5	須恵器	坏	[13.2]	5.0	7.2	長石・石英・砂粒	黄灰	普通	底部回転糸切り	P5 45%・口縁部に自然釉
6	須恵器	坏	—	(4.0)	8.0	長石・石英・砂粒	黄灰	普通	底部回転糸切り後、ヘラ削り・体部外面ロクロナデ	P6 70%
7	須恵器	坏	—	(4.0)	7.1	長石・石英・砂粒	黄灰	普通	体部外面ロクロナデ	P7 50%
8	須恵器	高台付坏	[14.0]	5.7	9.0	長石・雲母・砂粒	灰	良好	底部回転糸切り後、高台貼り付け・底部ヘラ書き	P8 65%・体部の一部に自然釉
9	土師器	椀	11.1	7.0	8.7	雲母・石英・砂粒・黒色粒子	赤褐	普通	体部内外面ロクロナデ	P9 60%・外面器面荒れ
10	須恵器	高盤	—	(3.5)	[14.8]	長石・雲母・石英・砂粒	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け・体部外面ロクロナデ	P10 30%
11	土師器	甕	[22.7]	(7.5)	—	長石・雲母・石英・砂粒・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ヨコナデ	P11 5%
12	土師器	甕	25.4	34.0	9.0	長石・雲母・石英・砂粒・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ヨコナデ・胴部外面ヘラミガキ	P12 60%・底部木葉痕
13	土師器	甕	21.8	31.3	8.6	長石・雲母・石英・砂粒・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部ヨコナデ・胴部内外面ヘラナデ・胴部外面ヘラミガキ	P13 60%・底部木葉痕
14	土師器	甕	22.0	(27.0)	—	長石・石英・砂粒	にぶい橙	普通	口縁部ヨコナデ・胴部内外面ヘラナデ	P14 60%
15	須恵器	甕	[25.2]	(11.7)	—	長石・石英・砂粒	黄灰	普通		P15 10%・胴部に自然釉
16	須恵器	甕	[20.8]	(5.6)	—	長石・雲母・石英・砂粒	黄灰	普通		P16 5%・口縁部に自然釉
17	土師器	甕	[16.7]	(12.2)	—	石英・砂粒・赤色粒子	にぶい橙	普通		P17 10%
18	須恵器	蓋	—	(2.6)	—	雲母・石英・砂粒	黄灰	普通		P18 10%

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	備考
1	鉄製品	鎌	(5.8)	3.4~4.1	0.2	40.0	刃部欠損	M1

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調	材質	特徴	備考
1	土製品	支脚	16.7	5.8	5.6	630.0	にぶい橙	粘土	円柱状	DP1 90%
2	土製品	支脚	(10.9)	5.0	5.7	470.0	にぶい橙	粘土	円柱状・指頭痕有り	DP2 60%・下半部欠損

第2号住居跡(第7・8図)

位置 A区の西側に位置する。

規模と形状 東西3.64m、南北3.54mの方形である。主軸方向は、N—14°—Eである。

壁 ほぼ直立して立ち上がっている。壁高は40cm~52cmである。

床 ほぼ平坦で、全面にわたってよく踏み固められている。壁溝が、東側と北側を周回している。

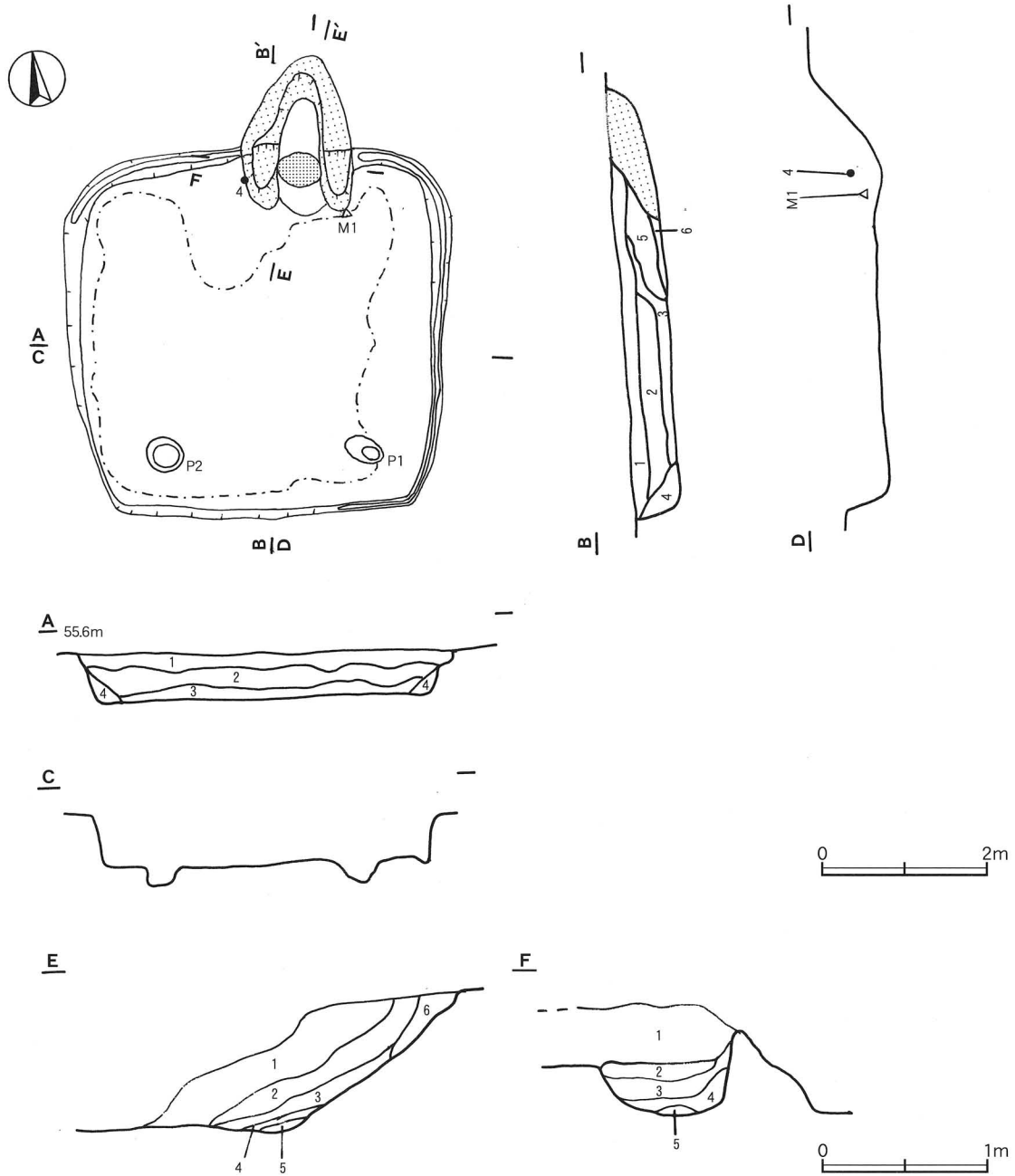
ピット 2ヶ所。P1は35cm×25cmの楕円形で、深さ20cm。P2は径35cmの円形で、深さ20cmである。P1・P2は、その位置から支柱穴と考えられる。

竈 北壁際のやや東寄りに付設されている。規模は、焚口から煙道まで約150cm、両袖部幅約100cmで、壁外へ85cmほど掘り込んでいる。砂質粘土で構築されている。火床面は浅い皿状に掘り窪められ、火熱を受けて赤変硬化している。煙道は、火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

覆土 6層に分層される。全体的に暗褐色土で、土の粒子はローム粒子と微量の炭化粒子、焼土粒子を含み、締りがある。レンズ状の堆積状態を示した自然堆積である。

遺物 土師器片312点(坏99・高台付坏1・甕212)、須恵器片100点(坏84・盤1・甕15)、鉄製品1(紡錘車の芯)が出土している。第8図M1が竈東袖付近から、4が西袖付近から出土している。また、覆土中から、体部外面に「公」と墨書されている1と、底部に「真」と墨書されている3が出土している。

所見 時期は出土した土器から、9世紀後葉と考えられる。



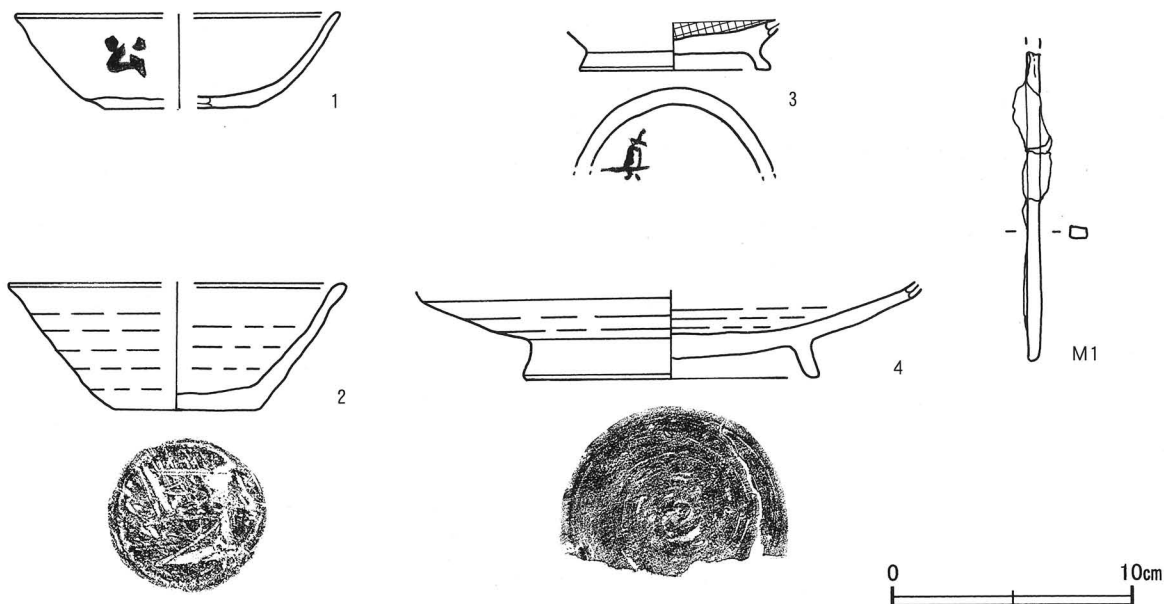
第7図 第2号住居跡実測図

S 1-2 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量・小ブロック微量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 4 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・小ブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム・粒子少量小ブロック微量、焼土粒子・ブロック少量、炭化物・粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子・小ブロック少量、焼土粒子中量・ブロック少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・ブロック中量、炭化粒子微量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子・小ブロック少量、焼土粒子少量・ブロック微量、灰粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子多量・ブロック中量、炭化粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子少量・ブロック微量、焼土粒子・炭化粒子微量



第8図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第8図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	杯	[13.4]	3.9	[6.3]	長石・石英・砂粒・赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端へら削り・底部回転へら切り	P1 20%・墨書「公」
2	須恵器	杯	[13.8]	5.3	5.6	長石・石英・砂粒・礫	黄灰	普通	体部ロクロナデ・底部回転糸切り後、へら削り	P2 60%
3	土師器	高台付杯	—	(2.0)	(8.0)	長石・石英・砂粒	橙	普通	内面黒色処理	P3 20%・墨書「真」
4	須恵器	盤	—	(3.9)	12.2	長石・砂粒	黄灰	普通	底部回転へら切り後、高台貼り付け・内外面ロクロナデ	P4 40%・内面に自然釉

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	備考
1	鉄製品	紡錘車	(12.9)	0.7	0.5	(25.0)	芯のみ	M1

第3号住居跡 (第9・10図)

位置 B区の北西側に位置する。

重複関係 第4号住居跡に南壁中央部、第5号住居跡に東壁が掘り込まれている。

規模と形状 東西5.10m、南北4.95mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。

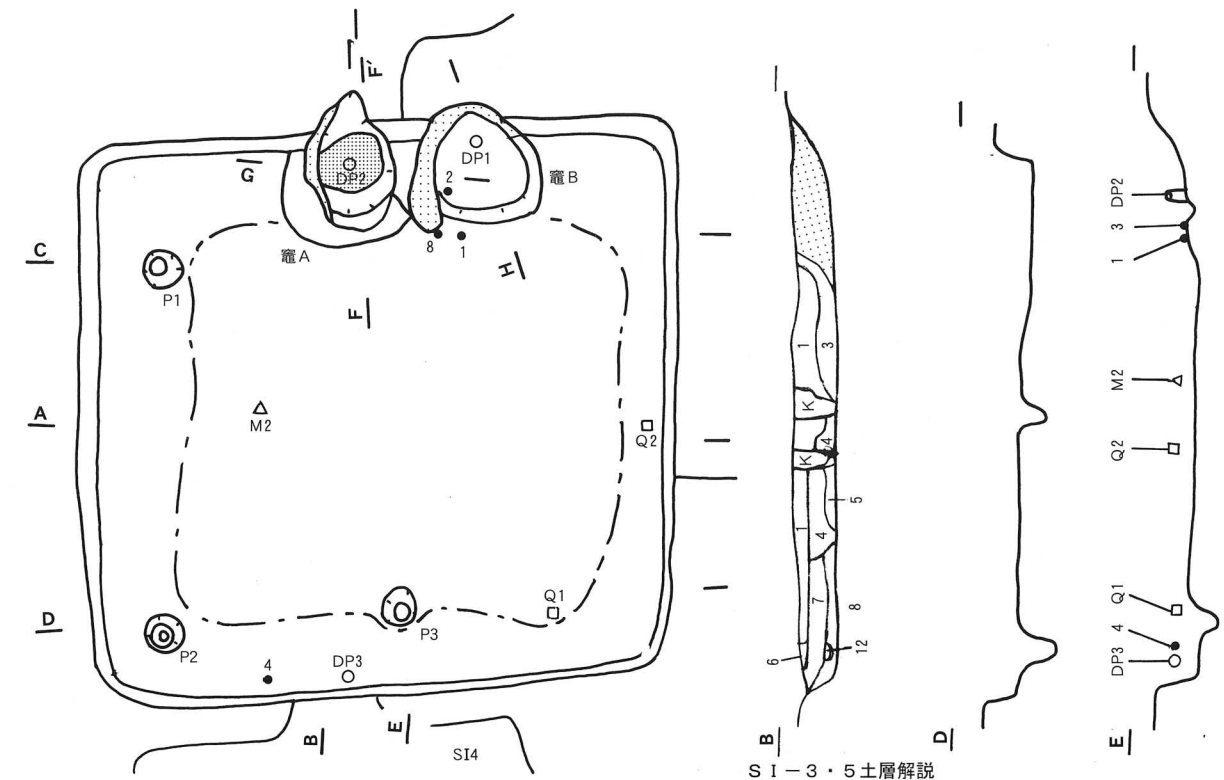
壁 ほぼ直立して立ち上がり、壁高は28~40cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

ピット 3ヶ所。P1・2は径35cm、深さ28~32cm、主柱穴である。P3は径33cm、深さ25cmで出入り口施設に伴うピットと考えられる。

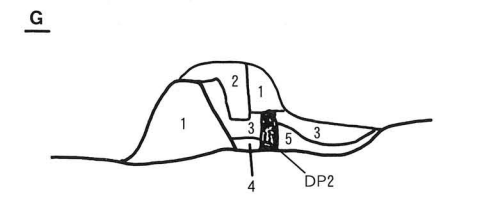
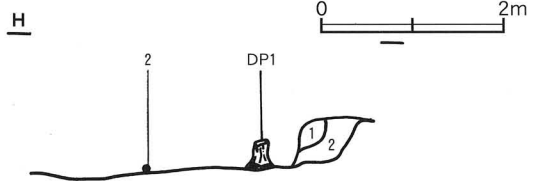
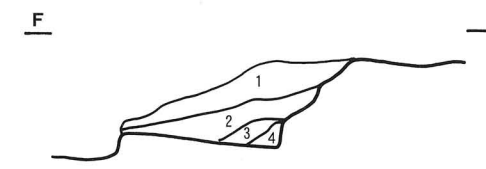
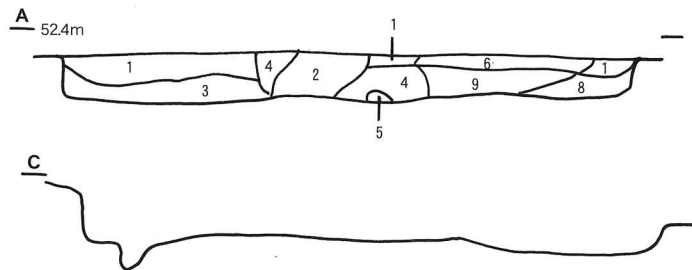
竈 2ヶ所。北壁際中央(竈A)と東側(竈B)に付設されている。竈Aの規模は、焚口から煙道まで130cm、西袖幅30cm、東袖部は攪乱により確認できなかった。北壁外へ30cmほど掘り込んでいる。火床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。煙道の立ち上がり部に土製支脚が据えられている。煙道は火床面から外傾して緩やかに立ち上がる。竈Bは、第5号住居に掘り込まれているため、西袖部の一部(幅20cm)と火床面を残すのみである。なお、煙道の立ち上がり部に土製支脚が据えられている。竈Bは竈Aの西袖部を壊し、造り替えられたものである。

覆土 9層に分層される。全体的に暗褐色土で、土の粒子はローム、焼土、炭化物、微量の砂粒や粘土ブロックを含み、締りがある。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。



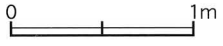
SI-3・5土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量・小ブロック微量、焼土粒子少量・小ブロック微量、炭化物少量
- 2 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子中量・小ブロック少量、焼土粒子微量・小ブロック少量、炭化粒子少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・小ブロック・炭化物微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、炭化物微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土小ブロック・炭化粒子微量
- 7 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・小ブロック・炭化粒微量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量・小ブロック微量、焼土粒子中量、炭化粒少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子少量・小ブロック微量、炭化物微量
- 10 暗褐色 ローム粒子・小ブロック、焼土粒子、炭化物、砂粒微量
- 11 暗褐色 ローム粒子・小ブロック少量、焼土ブロック微量
- 12 暗褐色 炭化粒子微量、粘土ブロック中量

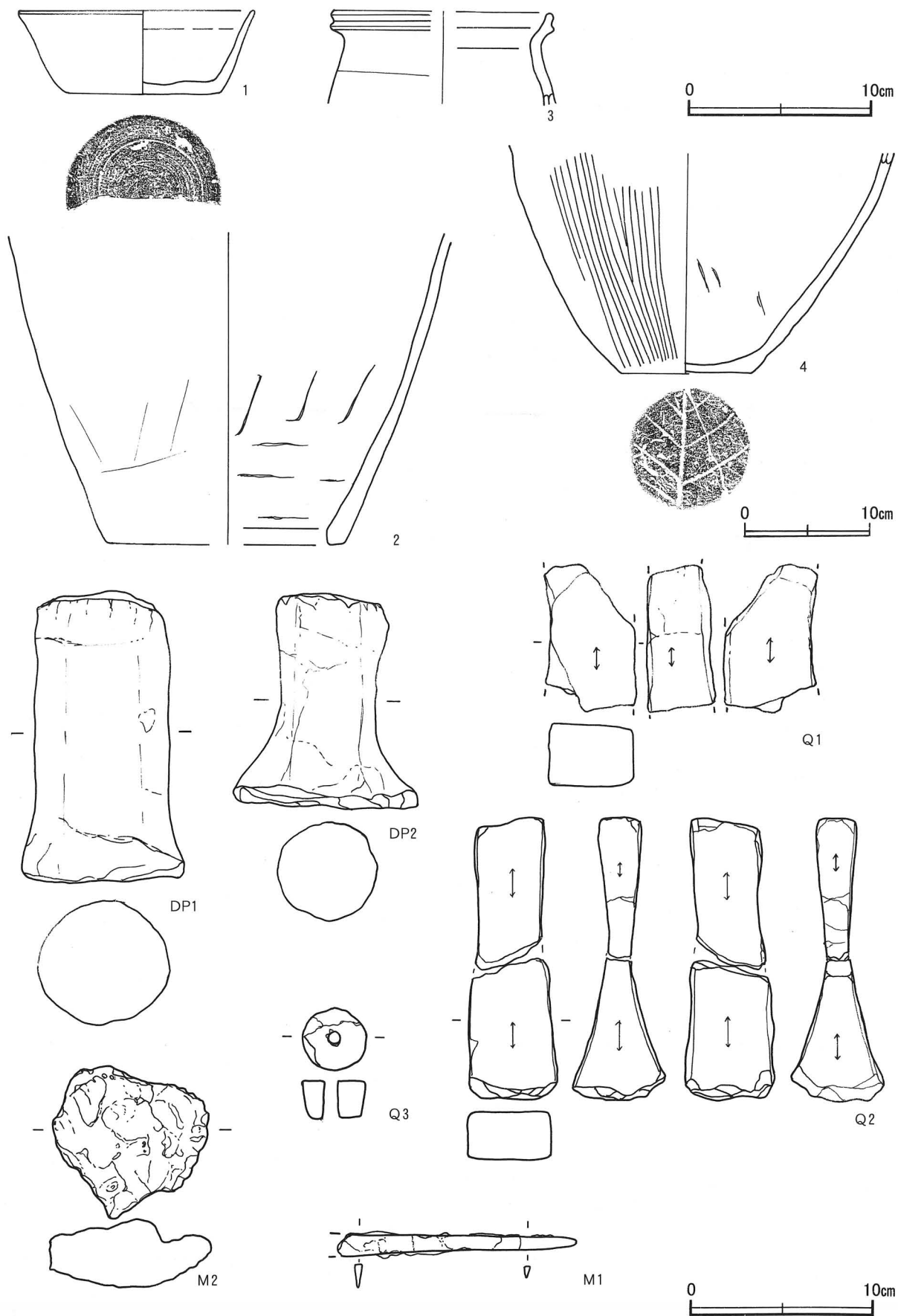


竈解説

- A 1 暗褐色 ローム粒子少量・ブロック微量、焼土粒子少量・ブロック微量、炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子微量、焼土粒子・ブロック少量、炭化物微量
- 3 暗赤褐色 ロームブロック微量、焼土粒子・ブロック中量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量・ブロック微量、焼土粒子少量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子少量、焼土粒子中量
- B 1 褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・ブロック少量、焼土ブロック・炭化粒子微量



第9図 第3号住居跡実測図



第10图 第3号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片284点（坏4、甕270、甑10）、須恵器片58点（坏53、甕4、蓋1）、鉄製品2点（刀子1、鉄滓1）、石製品2点（砥石2）、土製品3点（支脚2、紡錘車1）、縄文土器片1点、石2点が出土している。遺物は覆土中層から床面にかけてほぼ全域に散在している。第10図1・2・3は竈B手前の床面から火床面にかけて出土している。4・Q1・DP3はいずれも南部の覆土下層から、M2は中央部覆土下層から、Q2は東部壁覆土下層から出土している。覆土中から出土している縄文土器片は流れ込みと考えられる。石が竈Aの火床面奥から出土し、火熱を受けている。

所見 時期は、第4号住居跡と第5号住居跡に掘り込まれていることや出土した土器から8世紀後葉と考えられる。

第3号住居跡出土遺物観察表(第10図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	須恵器	坏	12.7	4.5	8.2	長石・雲母・砂粒	灰	良好	体部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	P1 50% 体部の一部に自然釉
2	土師器	甑	—	(16.7)	(12.8)	長石・雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	胴部内・外面ヘラナデ・輪積み痕	P2 30%
3	土師器	甕	(11.7)	(5.0)	—	雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通		P3 50%
4	土師器	甕	—	[15.6]	9.2	長石・雲母・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	胴部ヘラナデ・底面木葉痕	P4 30%

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調	特徴	備考
1	鉄製品	刀子	(12.9)	0.6~1.2	0.3	20.0	にぶい橙		M1
2	鉄製品	鉄滓	8.2	8.8	3.7	260.0	にぶい橙		M2

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調	特徴	備考
1	石製品	砥石	(8.0)	5.0	3.7	200.0	赤灰		Q1 一部のみ
2	石製品	砥石	15.2	4.8	2.6	270.0	灰黄		Q2
3	石製品	紡錘車	3.3	3.3	2.0	30.0	褐灰	無文・側面からわずかに膨らむ円錐台形	Q3 孔径 1.0cm

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調	特徴	備考
1	土製品	支脚	15.7	7.2~8.9	6.7~8.0	1060	橙		DP1
2	土製品	支脚	11.6	5.3~10.1	5.3~9.8	690	にぶい赤褐		DP2

第4号住居跡（第11・12図）

位置 B区の西側に位置する。

重複関係 第3号住居跡の南壁南東部を掘り込んでいる。

規模と形状 東西3.65m、南北4.05mの方形で、主軸方向はN-11°-Eである。

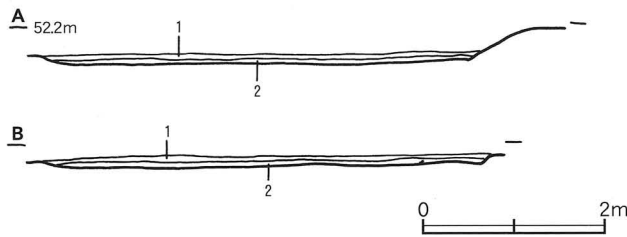
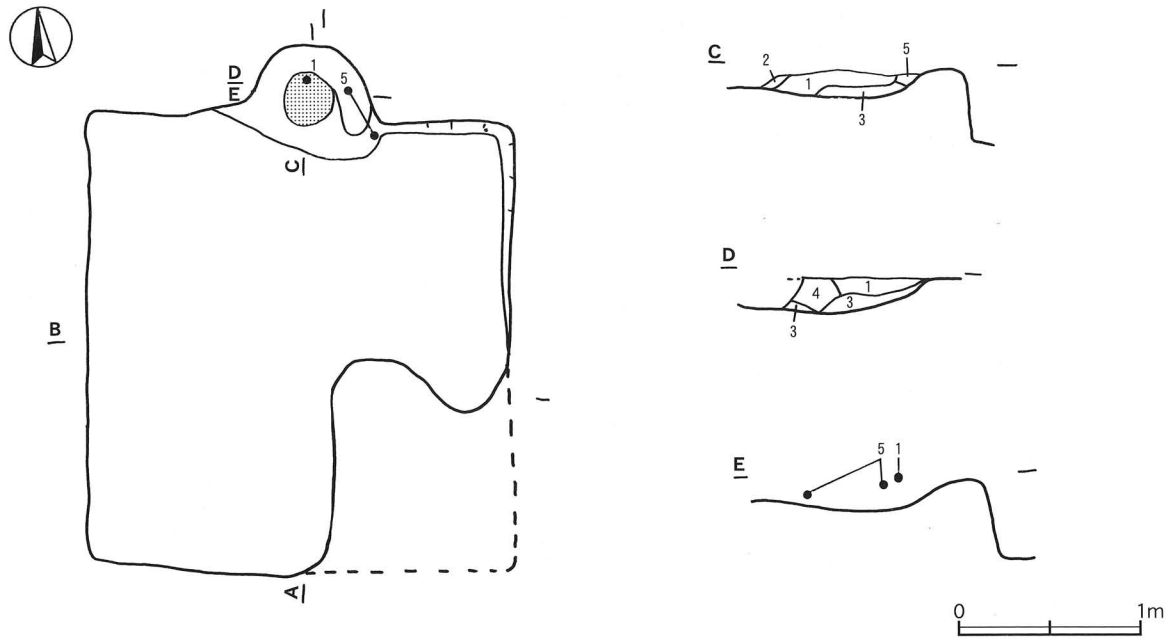
壁高 床面が露出した状態で検出し、壁の立ち上がりは確認できなかった。

床 ほぼ平坦である。壁溝は確認できなかった。

ピット 確認できなかった。

竈 遺存状態が悪く、火床面と東袖部しか確認できなかった。北壁を75cm程度掘り込んで構築されている。東側袖幅は、27cmである。袖部は、土師器甕片が構築材として使われ、灰色の砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面を使用しており、火熱を受けて赤変硬化している。なお、火床面中央には土師器坏が逆位で支脚として据えられている。

覆土 攪乱がひどく、確認できたのは、暗褐色土の層のみである。



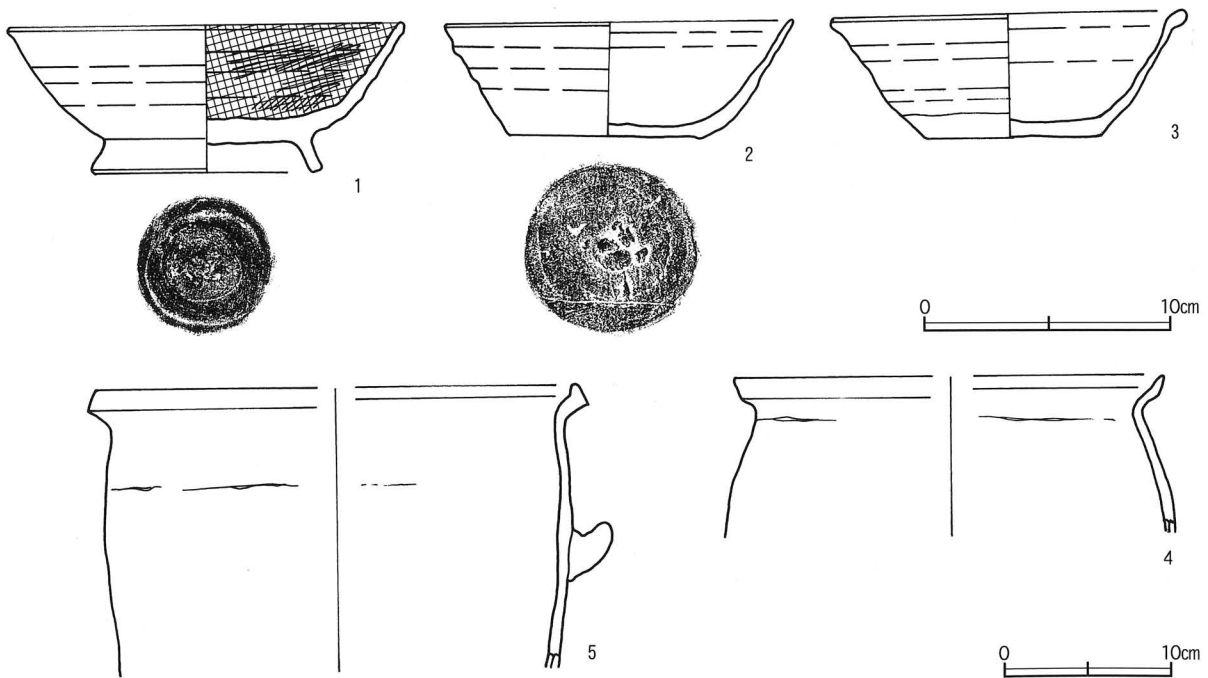
S I - 4 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒少量
- 2 褐色 ローム粒子中量

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 焼土粒子・小ブロック中量、炭化粒少量
- 2 灰色 ローム粒子少量、砂質粘土多量
- 3 暗褐色 焼土粒子中量・ブロック多量
- 4 明赤褐色 焼土粒子多量、炭化粒少量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量、炭化粒微量

第11図 第4号住居跡実測図



第12図 第4号住居跡出土遺物実測図

遺物 土師器片41点（坏14、高台付坏2、甕25）、須恵器片2点（坏2）が出土している。遺物は、火床面と北東部の床面から出土している。攪乱がひどく細片が多いため図示できたのは、3点のみである。第12図1は火床面中央、2は北東部の壁際、5は西袖部から出土している。

所見 時期は、第3号住居跡を掘り込んでいることや出土した土器から9世紀前葉と考えられる。

第4号住居跡出土遺物観察表(第12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	高台付坏	15.8	6.0	9.2	長石・雲母・砂粒・石英	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き・底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	P1 90%
2	須恵器	坏	14.1	4.8	8.0	長石・雲母・石英	灰白	普通	底部回転糸切り後、ヘラ削り	P2 70%
3	須恵器	坏	14.5	5.0	7.1	長石・雲母・砂粒	灰	普通	底部回転ヘラ切り	P3 50%
4	土師器	甕	[23.0]	(8.5)	—	長石・雲母・砂粒・石英	にぶい橙	普通	体部外面ヘラナデ	P4 10%
5	土師器	甕	[25.5]	(15.0)	—	長石・雲母・砂粒・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	内外面体部ヘラナデ、把手	P5 10%

第5号住居跡（第13・14図）

位置 B区の北側に位置する。

重複関係 第3号住居跡と第6号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 東西3.95m、南北3.70mの方形で、主軸方向はN-6°-Eである。

壁 ほぼ直立して立ち上がり、壁高は25cm程度である。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

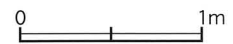
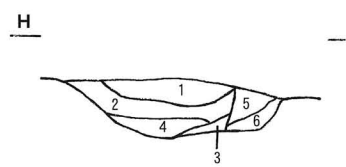
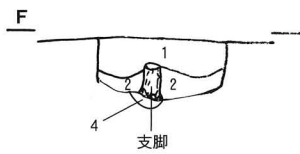
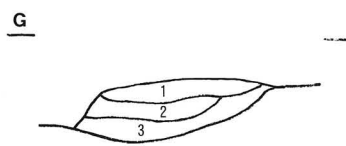
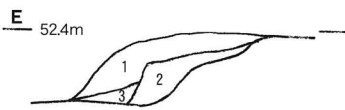
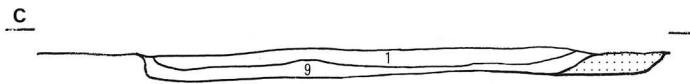
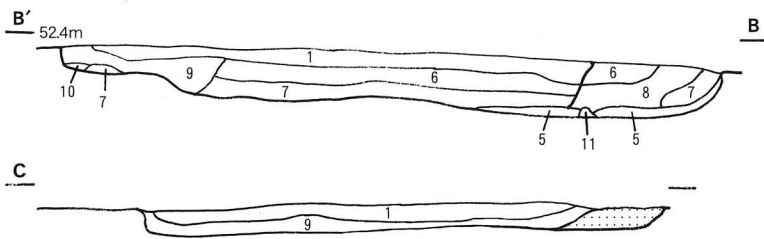
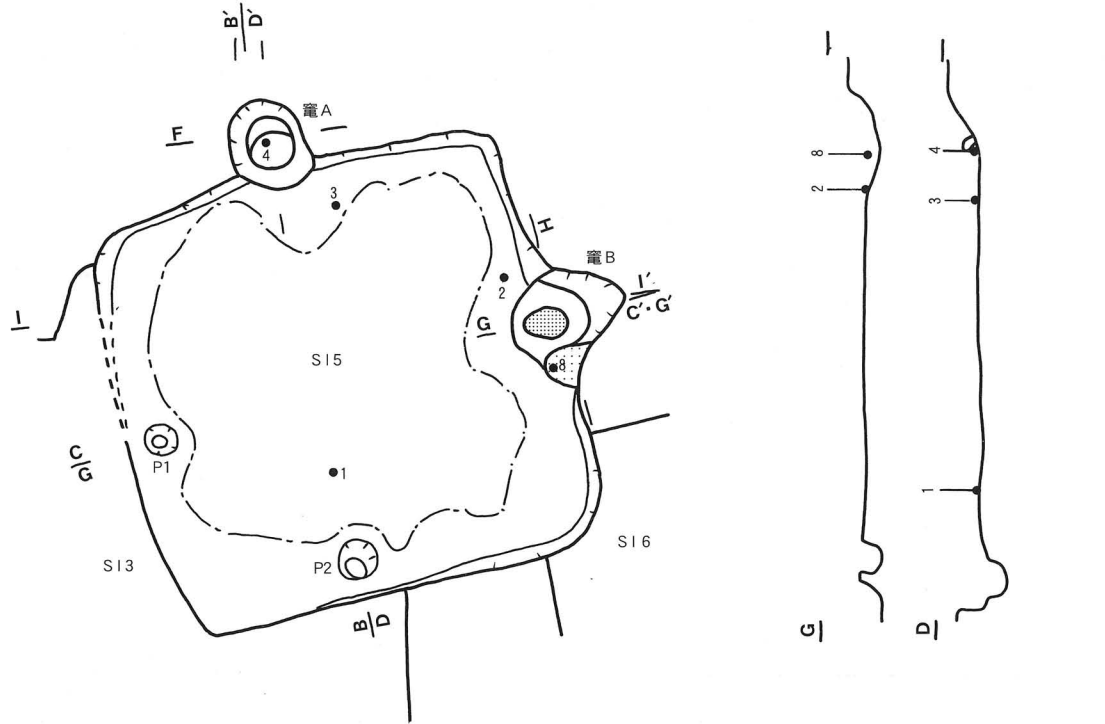
ピット 2ヶ所。P1は、径25cm、深さ17cmである。P2は、径32cm、深さ20cmである。P1・2はそれぞれ竈と対峙しており、いずれも出入り口施設に伴うピットと考えられる。主柱穴は確認できなかった。

竈 2ヶ所。北壁際中央部（竈A）と東壁際中央部（竈B）に付設されている。竈Aの規模は、焚口から煙道まで80cm、火床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変硬化している。北壁外へ60cm掘り込んでいる。逆位の須恵器坏に土製支脚が据えられている。これは、支脚の安定を図るものと考えられる。竈Bの規模は、焚口から煙道まで100cm、南袖幅30cmである。南袖部内に土師器甕片が芯材としてみられる。北袖部は確認できなかった。火床面は、床面を6cm掘り込んでいる。土層断面から竈Aから竈Bに造り替えられたと考えられる。

覆土 12層に分層される。全体的に暗褐色土で、土の粒子はローム、焼土、炭化粒、微量の砂粒を含む。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。（土層解説は第3号住居跡第9図に記載）

遺物 土師器片327点（坏30、高台付皿1、甕270、椀26）、須恵器片34点（坏16、高台付坏4、甕14）が出土している。遺物は覆土下層から床面にかけてほぼ全域に散在しており、そのほとんどが細片である。そのうち図示できたものは、5点のみである。第14図1は南側床面から出土している。2は竈B周辺の床面から、8は竈B袖部に正位の状態、3は竈A手前の床面から、4は火床面中央から出土している。なお、覆土中に5「真」、6「丈」の墨書土器片2点、朱塗り壺片1点が出土している。

所見 本跡は、竈の作り替えに伴って出入り口施設に伴うピットが移動していると思われる。時期は、北竈から東竈への造り替え、第3号住居跡と第6号住居跡を掘り込んでいることや出土した土器から9世紀後葉と考えられる。



S I - 5 竈土層解説

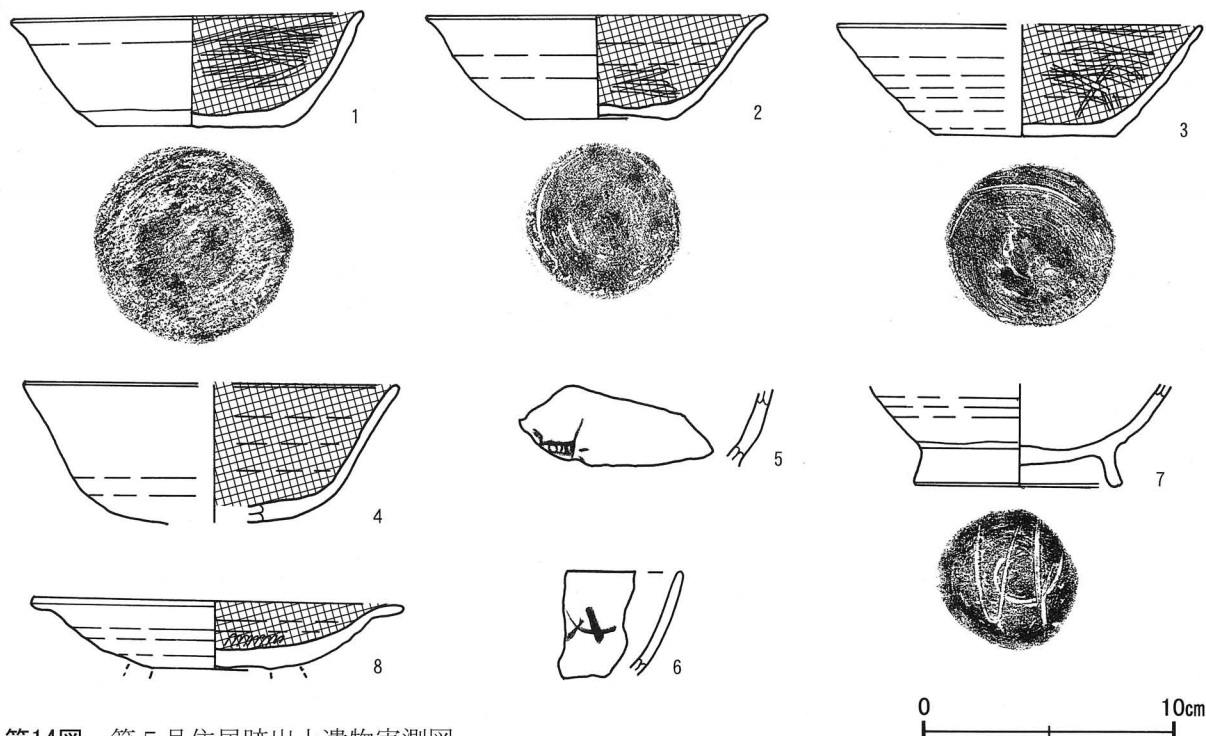
竈A

- 1 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子・小ブロック少量、炭化物粒子微量
- 2 赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子・小ブロック中量、炭化物微量
- 3 灰褐色 炭化粒子微量、粘土粒子多量

竈B

- 1 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子少量・小ブロック微量、炭化物・粒子微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子・小ブロック・炭化物少量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 4 赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子少量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子・炭化物・粘土粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化物微量、粘土粒子中量

第13図 第5号住居跡実測図



第14図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物観察表(第14図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	坏	14.0	4.5	7.0	長石・雲母・石英・砂粒・赤色粒子	にぶい褐	普通	内面へら磨き・底部回転へら切り	P1 90% 内面黒色処理
2	土師器	坏	13.4	4.1	5.8	長石・雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	内面へら磨き・底部回転へら切り	P2 80% 内面黒色処理
3	土師器	坏	[14.4]	4.4	6.5	長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転へら切り	P3 75% 内面黒色処理
4	土師器	坏	[14.8]	(5.5)	—	砂粒・石英・雲母	にぶい橙	普通	体部内外面ロクロナデ	P4 40% 内面黒色処理
5	土師器	坏	—	(3.1)	—	砂粒・雲母・石英・黒色粒子	にぶい橙	普通		P5 5% 内面黒色処理・墨書「真」
6	土師器	坏	—	(4.1)	—	砂粒・石英	にぶい橙	普通		P6 5% 内面黒色処理・墨書「丈」
7	須恵器	高台付坏	—	(4.0)	8.2	長石・砂粒・石英	黄灰	普通	回転へら切り後、高台貼り付け	P7 30%
8	土師器	高台付皿	14.4	(2.7)	—	雲母・砂粒	にぶい褐	普通	内面へら磨き・底部回転へら切り後、高台貼り付け	P8 90% 内面黒色処理

第6号住居跡(第15~17図)

位置 B区の北西寄りに位置する。

重複関係 北西部を第5号住居跡に掘り込まれている。

規模と形状 東西3.72m、南北3.83mの方形である。主軸方向は、N-9°-Eである。

壁 ほぼ直立して立ち上がっている。壁高は40cm~45cmである。

床 ほぼ平坦で、壁際を除き全体的によく踏み固められている。壁溝は、北壁際を除いて巡っている。竈手前から中央部にかけて、焼土や粘土粒子が散在している。

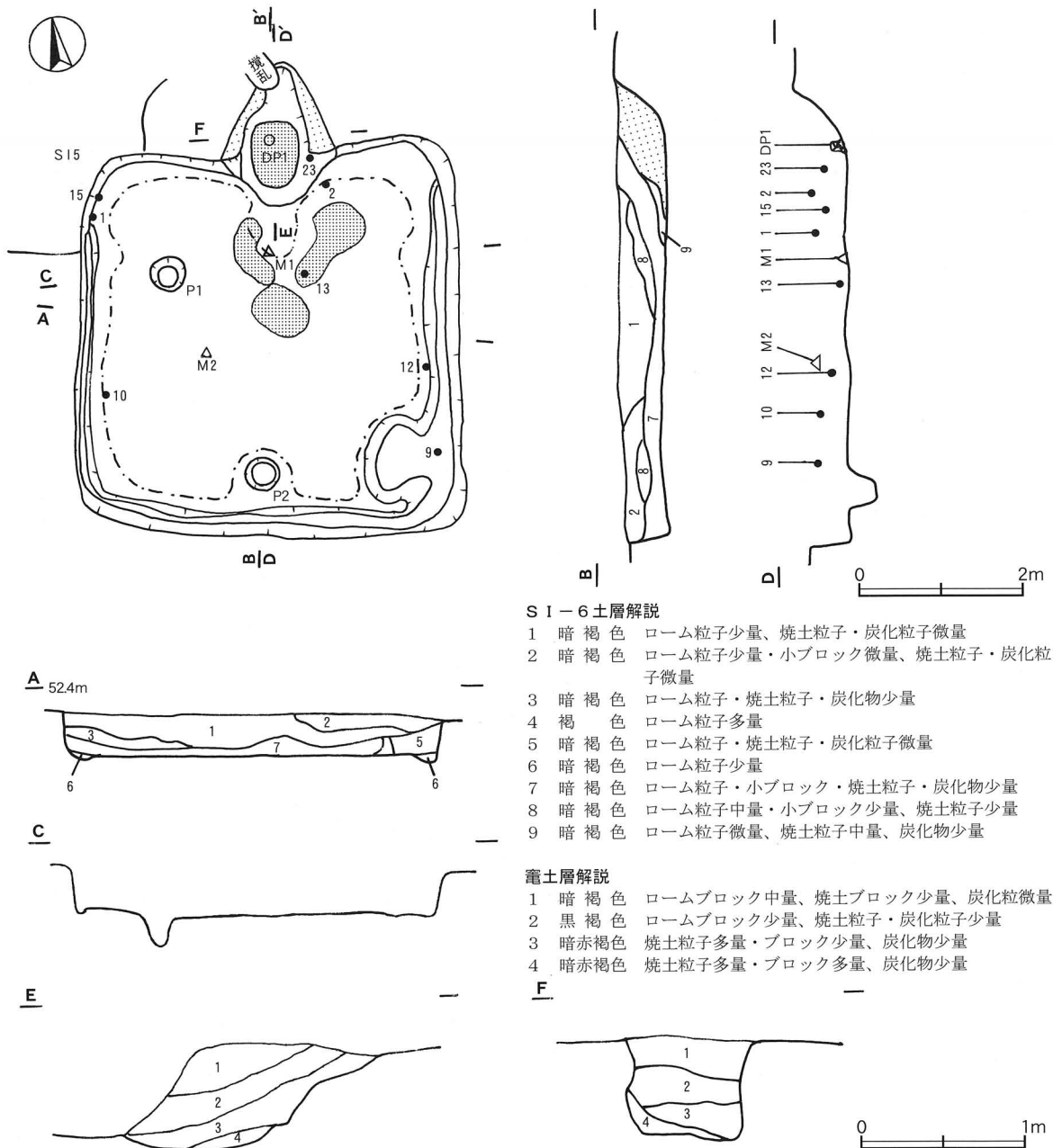
ピット 2ヶ所。P1は径35cm、深さ30cmである。支柱穴と考えられる。P2は径35cm、深さ28cmである。P2は南壁際の中央部に、竈と対峙して位置することから、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁中央部を壁外へ86cmほど掘り込んで付設されている。規模は、焚口から煙道まで約135cm、両袖部幅は約110cmである。袖部は土師器甕片を芯材にして、砂質粘土で構築されている。火床面は浅い皿状に掘り込まれており、火熱を受けて赤変硬化している。燃焼部も火熱により焼き締められており、使用頻度の高さが窺われる。火床面中央には、角柱状の土製支脚が据えられている。煙道は火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

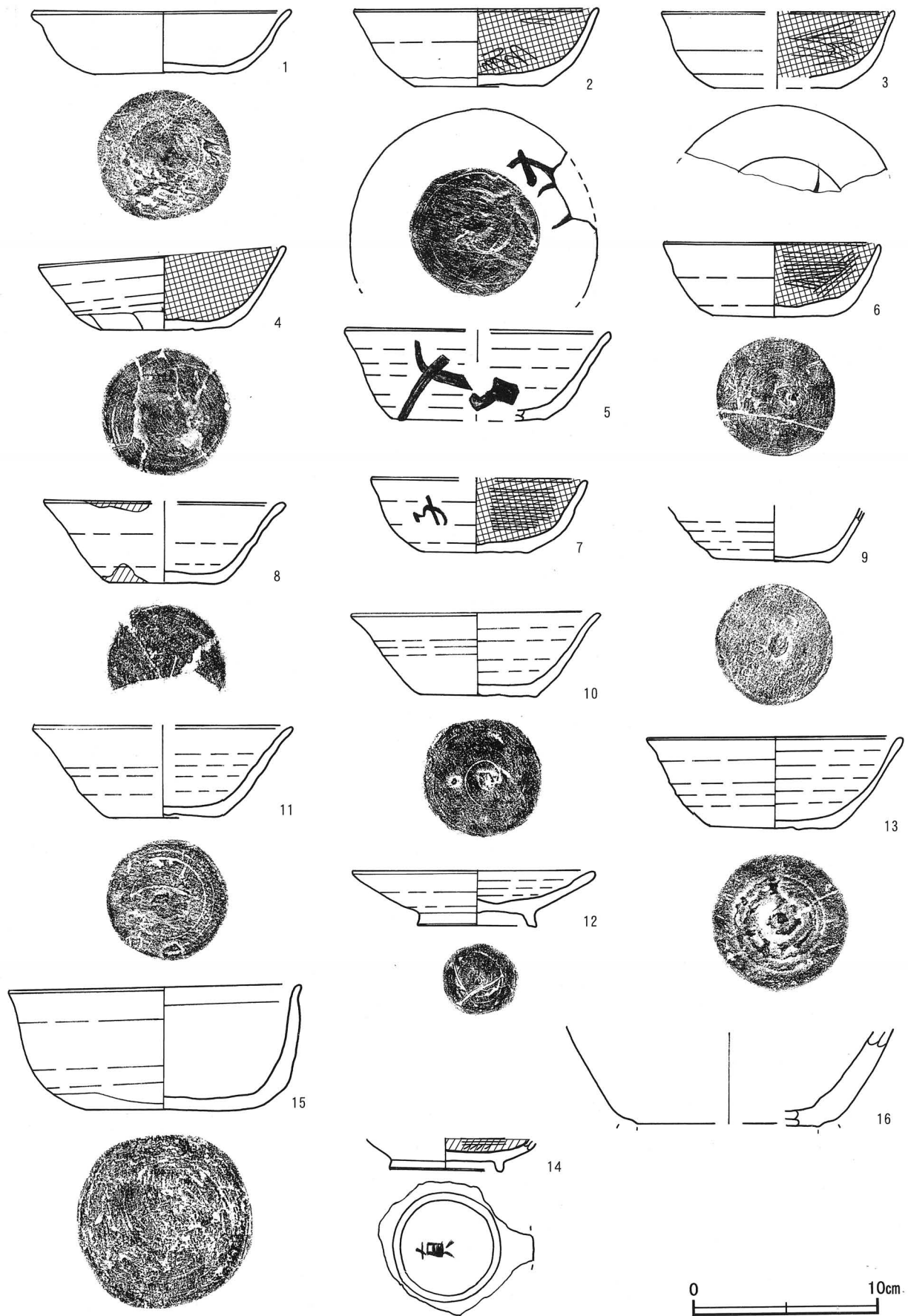
覆土 9層からなる。全体的に暗褐色土で、上層はローム粒子、焼土粒子、炭化粒子を含み、下層はロームブロックや炭化物も含み、締りがほとんど無い。上層はブロック状の堆積状態を示した人為堆積、下層はレンズ状の自然堆積である。

遺物 須恵器片81点（坏66、甕15、甌4、盤1、長頸瓶1）、土師器片342点（坏127、高台付坏1、椀1、甕213）、鉄製品2点（刀子・鉄斧）、土製品1点（支脚）が出土している。第16図1と15は北西壁際から、2は竈付近の覆土中より出土している。9、12は東壁際の覆土中層から、10は西壁際の覆土中層から出土している。住居中央北寄りの床面からは、13と第17図M1 刀子が、中央西寄りの覆土中層からはM2の鉄斧が出土している。第17図23は竈袖部から出土しており、芯材として使われたものと考えられる。また、墨書土器が11点出土している。「丈」が5点、「真」と「子」が1点ずつ、残り4点は判読できなかった。

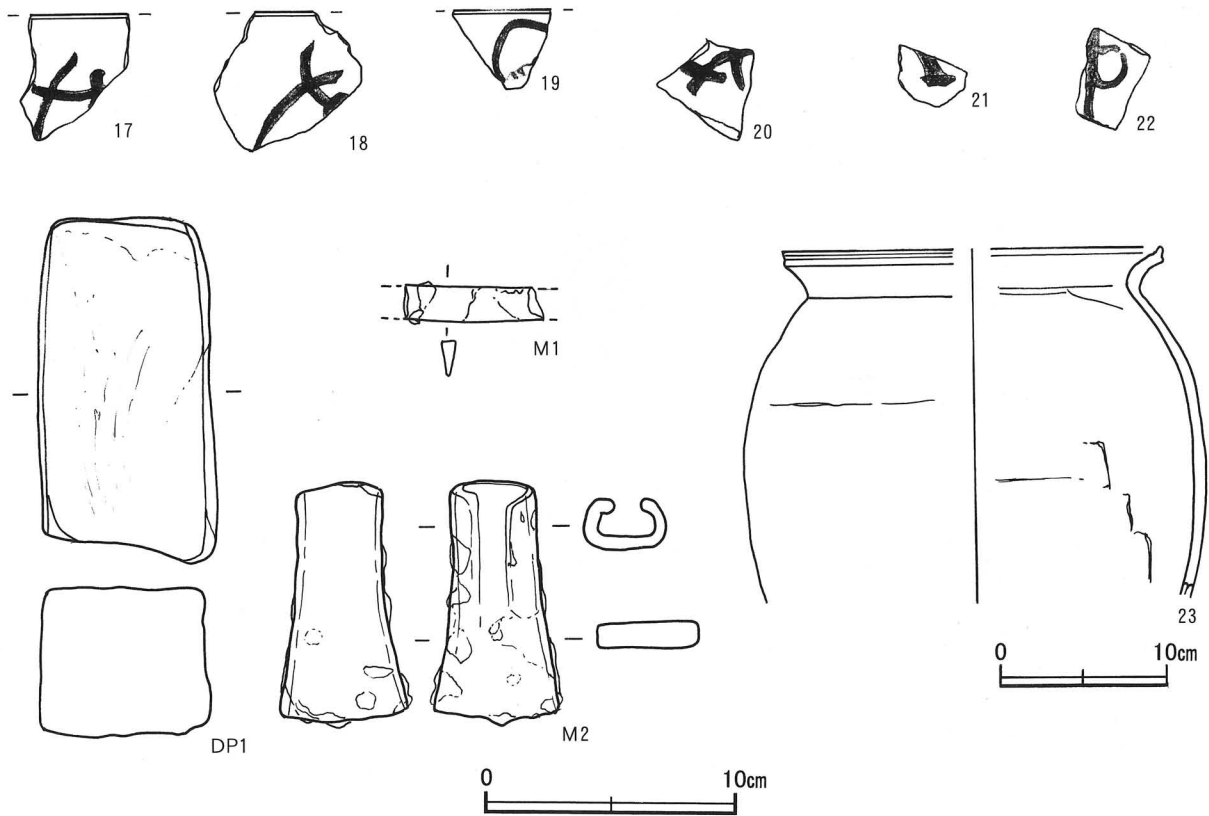
所見 時期は、出土した土器から9世紀中葉と考えられる。遺物の出土点数は多く、特に墨書土器の出土点数は、今回調査した住居跡中で最も多い。鉄斧や刀子など、特徴のある遺物も出土しており、この集落内で中心的な役割を果たしていた住居跡と推定される。



第15図 第6号住居跡実測図



第16图 第6号住居跡出土遺物実測図(1)



第17図 第6号住居跡出土遺物実測図(2)

第6号住居跡出土遺物観察表(第16・17図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	坏	14.3	3.4	7.0	長石・雲母・石英	にぶい橙	普通	体部内面ナデ・底部回転ヘラ切り	P1 100%
2	土師器	坏	13.1	4.2	7.0	雲母・石英・砂粒・赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き・体部下端ヘラ削り	P2 70%・体部外面墨書 内面黒色処理
3	土師器	坏	[12.4]	4.1	[6.8]	雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	内面ヘラ磨き	P3 20%・底部墨書・内面 黒色処理
4	土師器	坏	13.2	4.5	6.9	長石・雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	体部外面ロクロナデ・底部回転ヘラ切り・ 体部下端ヘラ削り	P4 75%・内面黒色処理
5	須恵器	坏	[14.2]	4.9	[8.5]	長石・石英・砂粒・ 黒色粒子	黄灰	普通	ロクロナデ	P5 30%・墨書「文」
6	土師器	坏	[11.6]	4.0	6.4	雲母・砂粒・赤色 粒子	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り・体部外面ロクロナデ・ 体部内面ヘラミガキ・体部下端ヘラ削り	P6 40%・内面黒色処理
7	土師器	坏	[11.7]	4.0	[5.9]	砂粒	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り・体部内面ヘラミガキ	P7 20%・墨書「子」・内面黒 色処理
8	須恵器	坏	[13.0]	4.3	6.1	長石・石英・砂粒	褐灰	普通	体部下端ヘラ削り	P8 40%・底部ヘラ書き有 り・外面すすり付着
9	須恵器	坏	—	(3.0)	6.6	長石・石英・砂粒	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り・体部外面ロクロナデ	P9 40%
10	須恵器	坏	13.4	4.6	6.3	長石・雲母・砂粒・ 黒色粒子	黄灰	普通	体部ロクロナデ・底部回転ヘラ切り	P10 80%
11	須恵器	坏	[14.0]	4.9	6.3	長石・砂粒・黒色 粒子	黄灰	普通	底部回転ヘラ切り・体部外面ロクロナデ	P11 50%
12	須恵器	高台付皿	12.8	3.0	6.4	長石・雲母・石英・ 砂粒・黒色粒子	黄灰	良好	体部外面ロクロナデ・底部ヘラ削り後、 高台貼り付け	P12 100%・口縁部に自然釉 底部ヘラ書き有
13	土師器	坏	14.0	5.0	7.2	長石・雲母・石英・ 砂粒	灰褐	普通	底部回転ヘラ切り	P13 90%・二次転用カ
14	土師器	高台付坏	—	(1.7)	6.2	長石・雲母・石英・ 砂粒	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け、ヘ ラミガキ	P14 10%・墨書「真」・内面 黒色処理
15	土師器	椀	16.0	6.8	9.0	長石・石英	にぶい橙	普通	体部下端ヘラ削り・体部外面ロクロナデ	P15 95%・内面漆付着・二 次転用カ

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
16	須恵器	長頸瓶	—	(5.3)	—	長石・砂粒・赤色粒子	暗灰	普通	高台貼り付け	P16 10%
17	土師器	坏	—	—	—	雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	内面黒色処理	P17 10%・体部外面・墨書「丈」
18	土師器	坏	—	—	—	雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	内面黒色処理	P18 10%・体部外面・墨書「丈」
19	土師器	坏	—	—	—	雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	内面黒色処理	P19 5%・体部外面・墨書
20	土師器	坏	—	—	—	雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	内面黒色処理	P20 5%・体部外面・墨書「丈」
21	土師器	坏	—	—	—	雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	内面黒色処理	P21 5%・体部外面・墨書「丈」
22	土師器	坏	—	—	—	雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	内面黒色処理	P22 5%・体部外面・墨書
23	土師器	甕	(20.0)	(18.5)	—	長石・雲母・石英・砂粒	にぶい橙	普通	胴部内面ヘラナゲ・口縁部ヨコナゲ	P23 20%・輪積み痕・外面炭化物付着

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	特徴	備考
1	鉄製品	刀子	(5.4)	1.4	0.5	20.0	刀身のみ	M1
2	鉄製品	鉄斧	10.0	5.3	0.5~1.1	170.0	刃部はやや幅広	M2 100%

番号	種別	器種	長さ	幅	厚さ	重量	色調	材質	特徴	備考
1	土製品	支脚	(13.7)	6.8	5.8	800.0	にぶい赤褐	粘土	角柱状	DP1

第7号住居跡（第18・19図）

位置 B区の中央部に位置する。

規模と形状 東西2.95cm、南北3.20cmの方形で、主軸方向はN-12°-Eである。

壁 ほぼ直立して立ち上がり、壁高は15~20cmである。

床 ほぼ平坦で、中央部がよく踏み固められている。壁溝は確認できなかった。

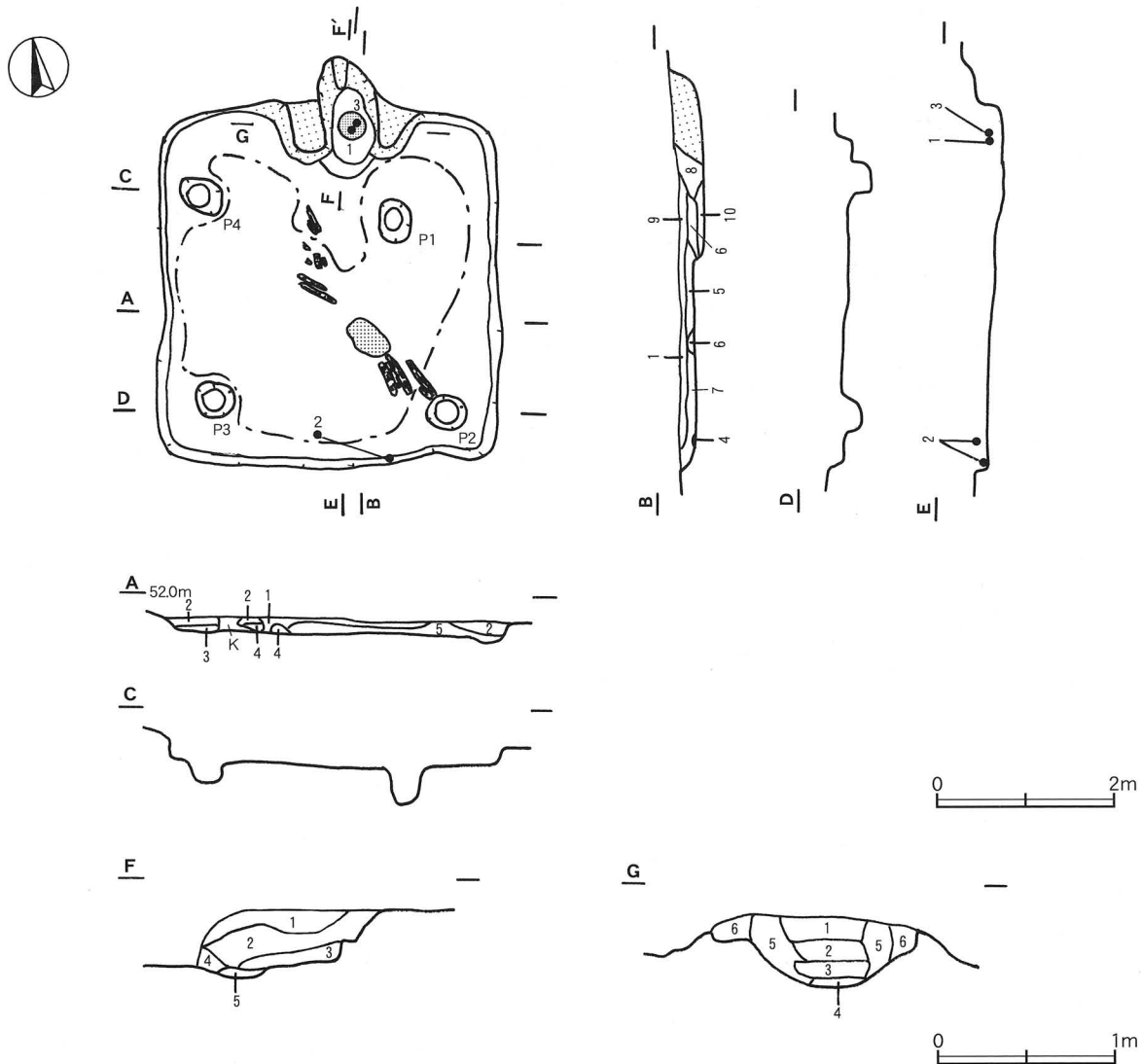
ピット 4ヶ所。P1~P4は、径30~40cm、深さ17~34cmである。いずれも支柱穴である。

竈 北壁中央部を45cm程度壁外へ掘り込み、袖部は黄褐色の砂質の強い粘土を用いて構築されている。規模は、焚口から煙道まで80cm、両袖部幅90cmである。火床面は、床面を6cmほど掘り込み、赤変硬化している。煙道の立ち上がり部に土製支脚が据えられており、その上面から須恵器坏1点が逆位の状態で、さらにその上面に土師器甕片8点が重ねられている。煙道は火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

覆土 10層に分層される。全体的に暗褐色土で、焼土粒子や炭化粒子を多く含み、締りがある。ブロック状の堆積状況を示した人為堆積である。

遺物 土師器片38点（坏3、甕35）、須恵器片8（高台付坏8）が出土している。遺物は、覆土下層から床面にかけて出土している。図示できたのは3点で、第19図1は火床面中央から出土し、2は1の上に重ねられて出土している。3は南側壁際の床面から破片が散らばって出土している。

所見 竈手前から南東側床面の炭化材や焼土塊の出土状況からみて火災にあったことが想定される。時期は、出土した土器から8世紀後葉と考えられる。



第18図 第7号住居跡実測図

SI-7土層解説

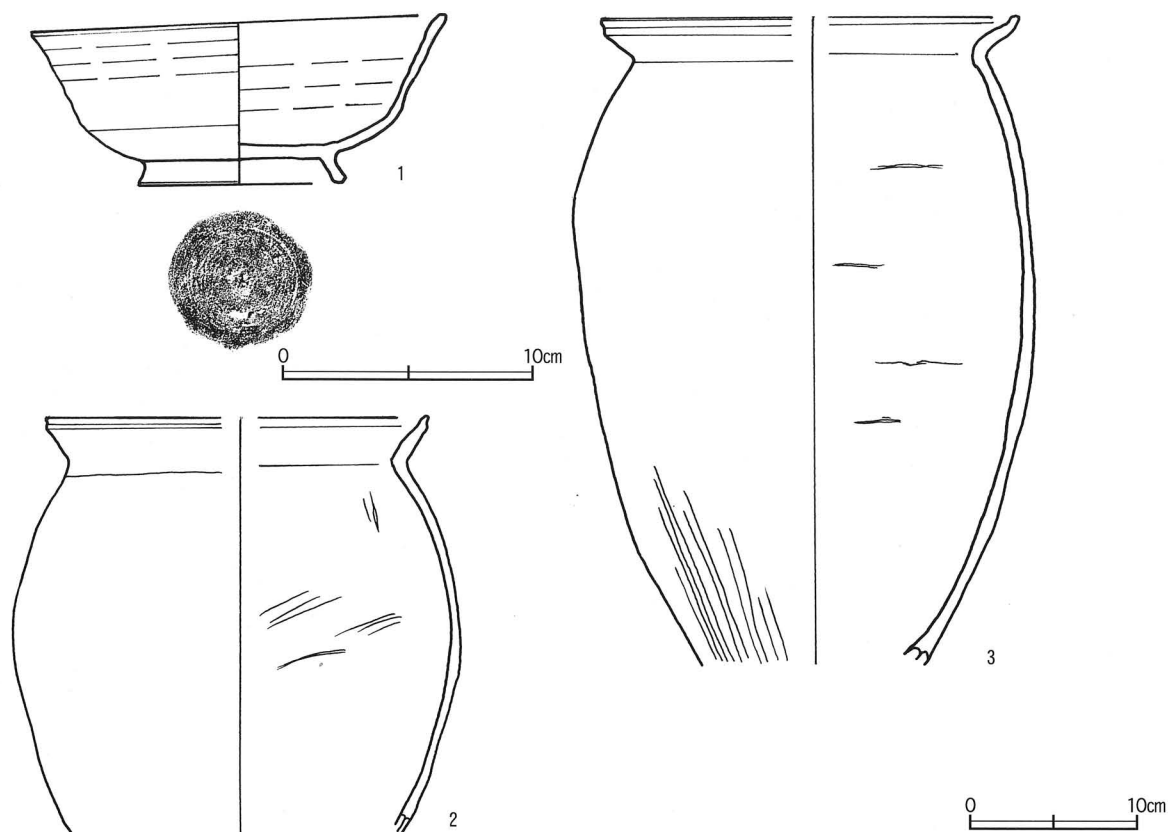
- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量、焼土粒子中量、炭化物微量
- 4 褐色 ローム粒子多量、炭化粒微量
- 5 暗褐色 ローム粒子中量、焼土粒子微量、炭化材少量・粒子微量
- 6 暗褐色 ローム粒子微量、焼土粒子少量
- 7 暗褐色 ローム粒子・炭化粒少量
- 8 暗褐色 ローム粒子少量
- 9 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 10 暗褐色 ローム粒子少量、ローム小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量

竈土層解説

- 1 暗褐色 炭化粒子微量、砂質粘土少量
- 2 灰褐色 炭化粒子微量、砂質粘土中量
- 3 暗赤褐色 焼土粒子中量、炭化物少量、砂質粘土中量
- 4 暗褐色 焼土粒子少量、炭化粒子・砂質粘土微量
- 5 灰褐色 焼土粒子微量、砂質粘土中量
- 6 黄褐色 炭化粒微量、砂質粘土多量

第7号住居跡出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	須恵器	椀	16.3	6.6	8.2	長石・石英・砂粒	灰	普通	体部外面ナデ・底部回転ヘラ切り後、高台貼り付け	P1 80%
2	土師器	甕	[20.0]	(21.5)	—	長石・石英・砂粒・雲母	にぶい赤褐	普通	胴部内面ヘラ当て痕	P2 20% 体部外面に炭化物付着
3	土師器	甕	[21.8]	(34.3)	—	長石・石英・砂粒・雲母	にぶい赤褐	普通	胴部外面ヘラ磨き・胴部内面ヘラナデ・輪積み痕	P3 70%



第19図 第7号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡（第20・21図）

位置 B区の最も南側に位置する。

規模と形状 東西4.98m、南北5.08mの方形で、主軸方向はN-2°-Wである。

壁 ほぼ直立して立ち上がり、壁高は6~14cmである。

床 ほぼ平坦で、全面が堅く踏み固められている。壁溝が北東コーナーから南西コーナーにかけて周回している。

ピット 5ヵ所。P1~P4は、径30~45cm、深さ53~71cmで、いずれも支柱穴である。P5は、径22cm、深さ25cmで、出入り口施設に伴うピットと考えられる。

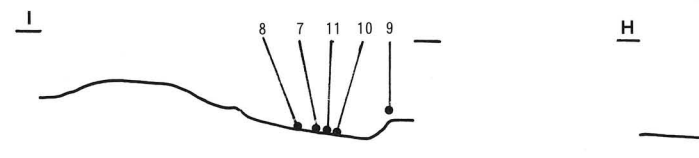
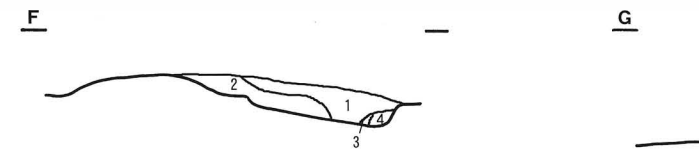
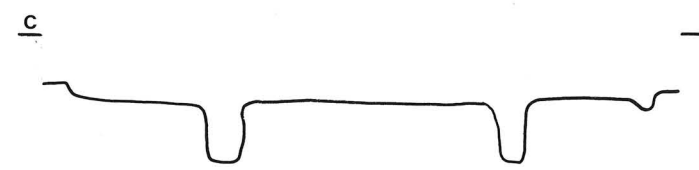
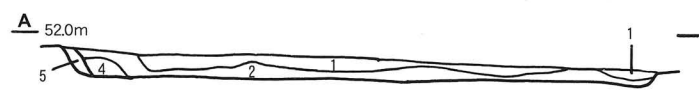
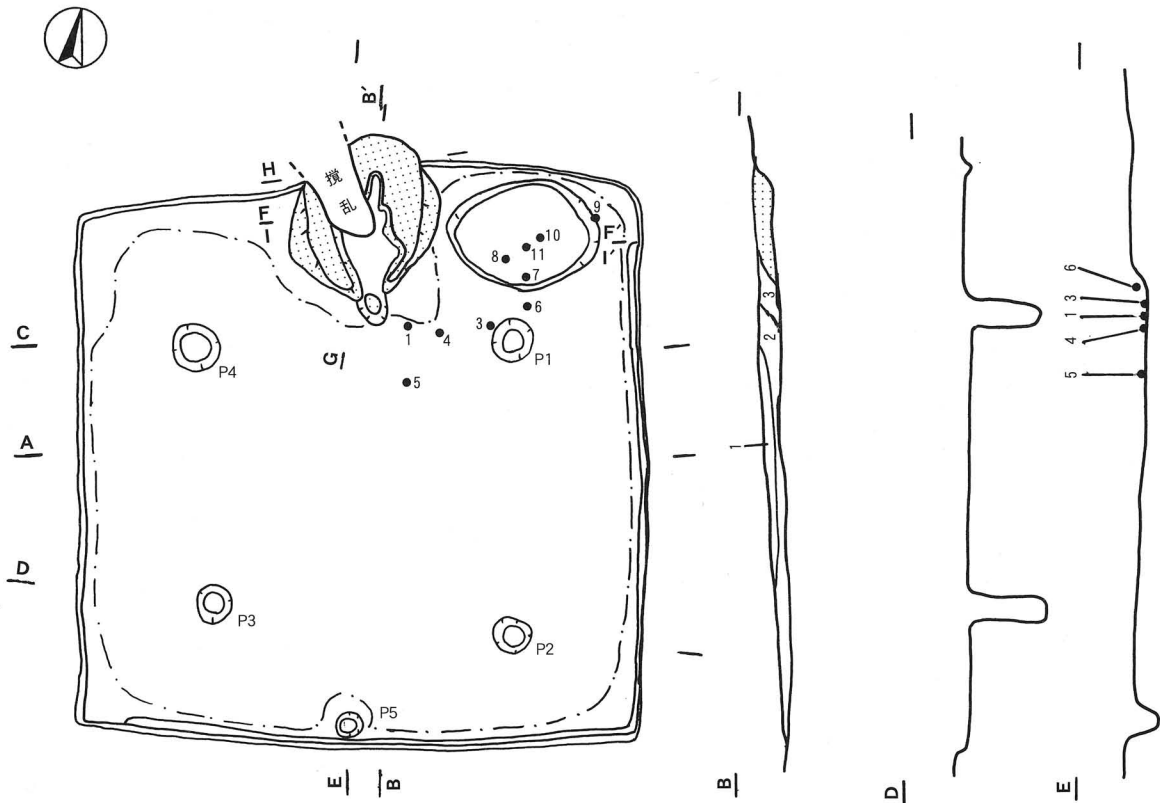
竈 北壁中央部を47cm程度壁外へ掘り込まれている。西側袖及び火床部が攪乱を受けている。東側袖幅20cm、ローム及び炭化粒を含む褐色の砂質粘土で構築されている。煙道は火床面から外傾して緩やかに立ち上がる。袖部の内側が赤変している。

貯蔵穴 北東コーナーに位置し、長軸130cm、短軸95cm、深さ20cmである。底面はやや傾斜している。

覆土 5層に分層される。全体的に暗褐色土で、土の粒子はローム、焼土、炭化物を含み、締まりはない。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

遺物 土師器片71点（坏18、碗8、甕35、壺1、甑10）、須恵器片2点（坏2）、縄文土器片1点が出土している。遺物は覆土下層から床面、貯蔵穴覆土上層から下層にかけて出土している。図示できたのは、10点である。第21図1は竈手前の床面から、3・4・5は北東側床面から、6は貯蔵穴手前の床面から出土している。7・8・10は貯蔵穴覆土下層から、9は貯蔵穴覆土上層から出土している。11朱書「丈」は貯蔵穴覆土下層から出土している。縄文土器片は覆土中から出土し、流れ込みと考えられる。

所見 時期は、出土した土器から7世紀後葉と考えられる。



S I - 8 土層解説

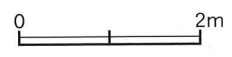
- 1 暗褐色 ローム粒子微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子少量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量、炭化物少量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、炭化物微量
- 5 褐色 ローム粒子多量

貯蔵穴土層解説

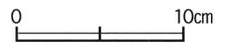
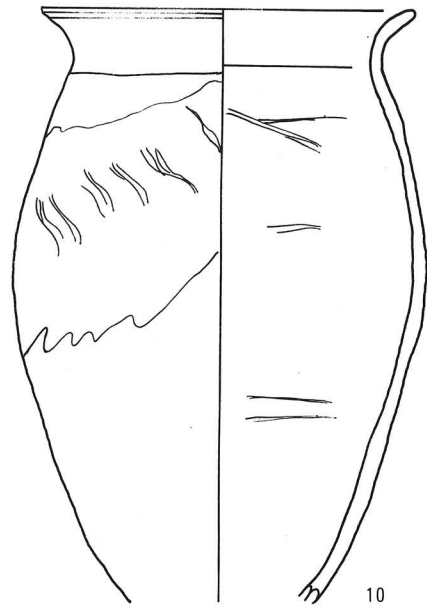
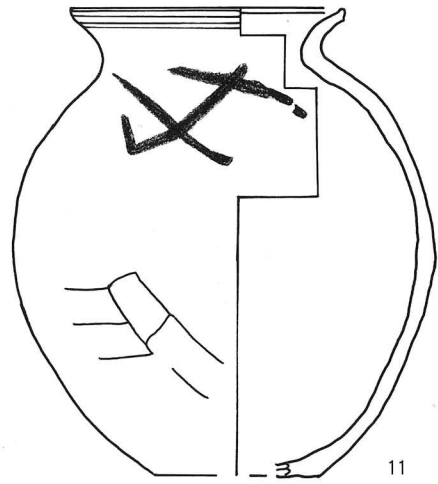
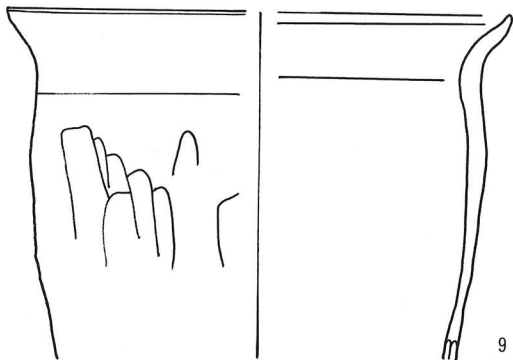
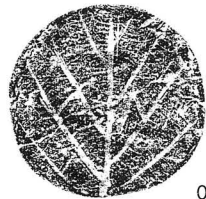
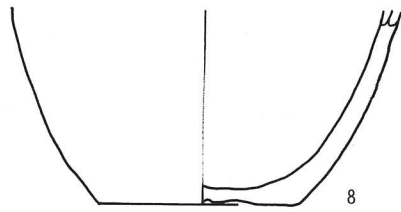
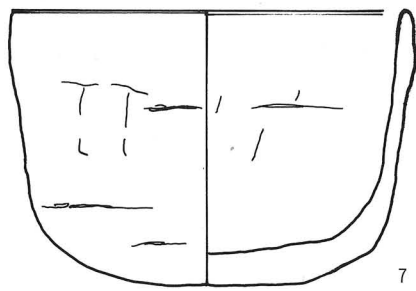
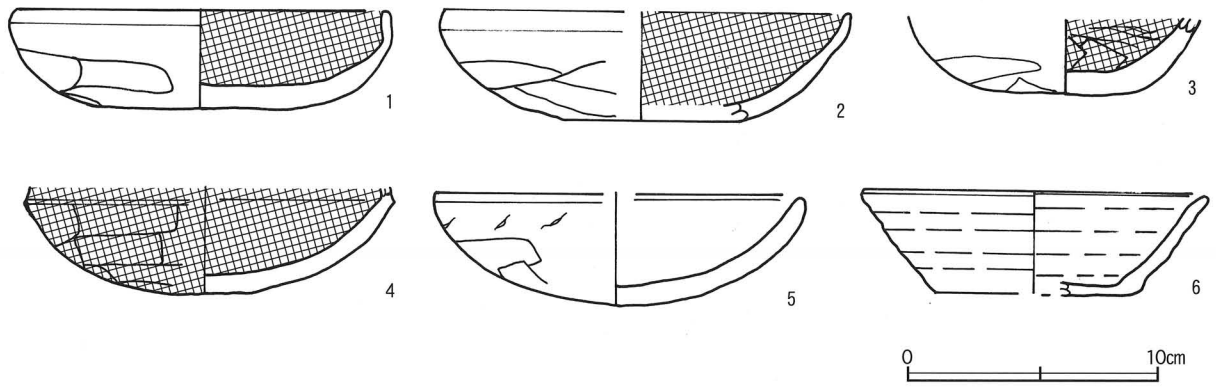
- 1 暗褐色 ローム粒子・炭化粒子中量
- 2 褐色 ローム粒子多量、炭化粒子微量
- 3 暗褐色 ロームブロック少量、炭化粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子中量、炭化粒子微量

竈土層解説

- 1 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子少量・ブロック微量、炭化粒微量
- 2 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子中量、炭化物微量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化物・粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・ブロック少量、炭化粒子微量
- 5 褐色 ローム粒子中量、炭化物微量



第20図 第8号住居跡実測図



第21図 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡出土遺物観察表(第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	坏	14.8	4.0	8.0	砂粒・石英	にぶい赤褐	普通	体部外面へラ削り	P1 85% 内面黒色処理
2	土師器	坏	[16.2]	(4.3)	—	長石・砂粒・雲母	橙	普通	体部下端外面へラ削り・内面ナデ	P2 40% 内面黒色処理
3	土師器	坏	—	(3.0)	5.8	長石・砂粒・石英・黒色粒子	橙	普通	内面へラナデ・体部下端外面へラ削り	P3 30% 内面黒色処理
4	土師器	坏	[14.0]	(4.2)	—	石英	にぶい橙	普通	体部下端外面へラ削り	P4 理 80% 内・外面黒色処理
5	土師器	坏	(14.6)	4.5	—	長石・雲母・砂粒	明赤褐	普通	体部下端外面へラ削り	P5 50%
6	須恵器	坏	13.8	4.1	—	長石・雲母・砂粒・石英	灰	普通	体部外面ロクロナデ・底部へラ削り	P6 70%
7	土師器	鉢	16.0	11.0	7.0	長石・雲母・砂粒・石英	橙	普通	体部外面へラ削り	P7 70% 外器面荒れ
8	土師器	甕	—	(7.7)	7.8	長石・石英・砂粒	にぶい赤褐	普通	底部木葉痕	P8 30% 外器面荒れ
9	土師器	甌	[26.4]	(18.2)	—	砂粒・石英	にぶい赤褐	普通	胴部外面へラナデ・口縁部ヨコナデ	P9 20%
10	土師器	甕	19.5	(31.3)	—	長石・雲母・砂粒・石英	にぶい赤褐	普通	胴部内・外面へラナデ・口縁部ヨコナデ	P10 70% 外器面荒れ・外面すず付着
11	土師器	壺	14.5	22.5	8.8	長石・雲母・砂粒・石英	赤褐	普通	胴部外面へラナデ・口縁部ヨコナデ	P11 80% 内器面荒れ・外面炭化物付胴部外面上位に朱書「丈」

第9号住居跡(第22図)

位置 C区の東側に位置する。

規模と形状 東西4.15m、南北4.10mの方形である。主軸方向はN-96°-Wである。

床 ほぼ平坦である。南壁は削られてしまっていて確認できなかった。壁溝は検出されなかった。

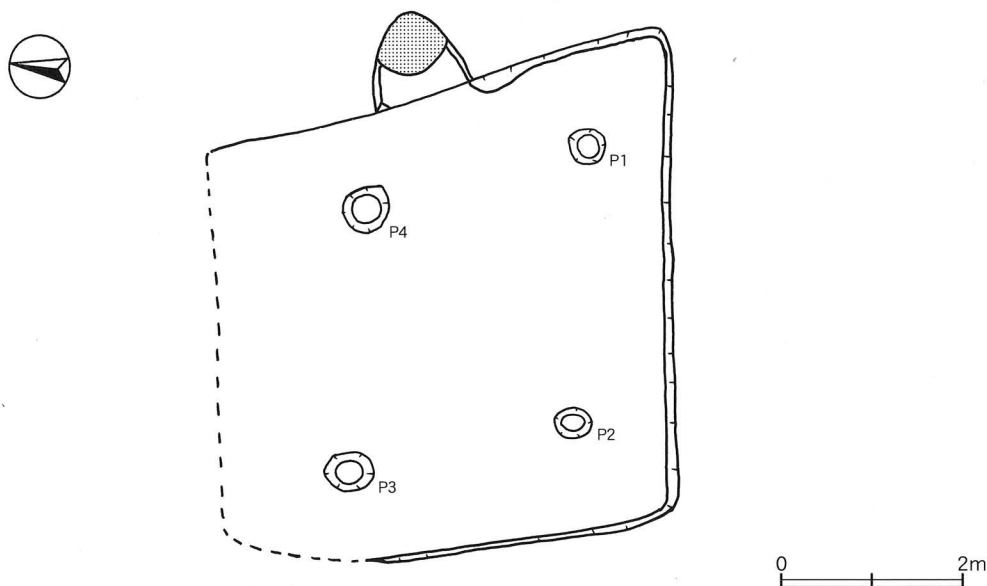
ピット 4ヶ所。P1~P4は径35cm~50cm、深さ5cm~20cmで、いずれも支柱穴と考えられる。

竈 西壁のほぼ中央に付設されているが、遺存状態が悪く火床面を残すのみである。火床面は床面とほぼ同じ高さで、火熱を受けて赤変している。今回の調査で西側に竈が付設されている住居は、本遺構のみである。

覆土 検出できなかった。

遺物 出土していない。

所見 攪乱がひどく、出土遺物も無く、時期等は不明である。B区とC区のあいだは、谷状の地形となっており、B区東端の住居からは距離的に離れている。C区で確認されたのは、本遺構のみである。



第22図 第9号住居跡実測図

第10号住居跡（第23・24図）

位置 A区の西側、第1号住居と第2号住居の間に位置する。

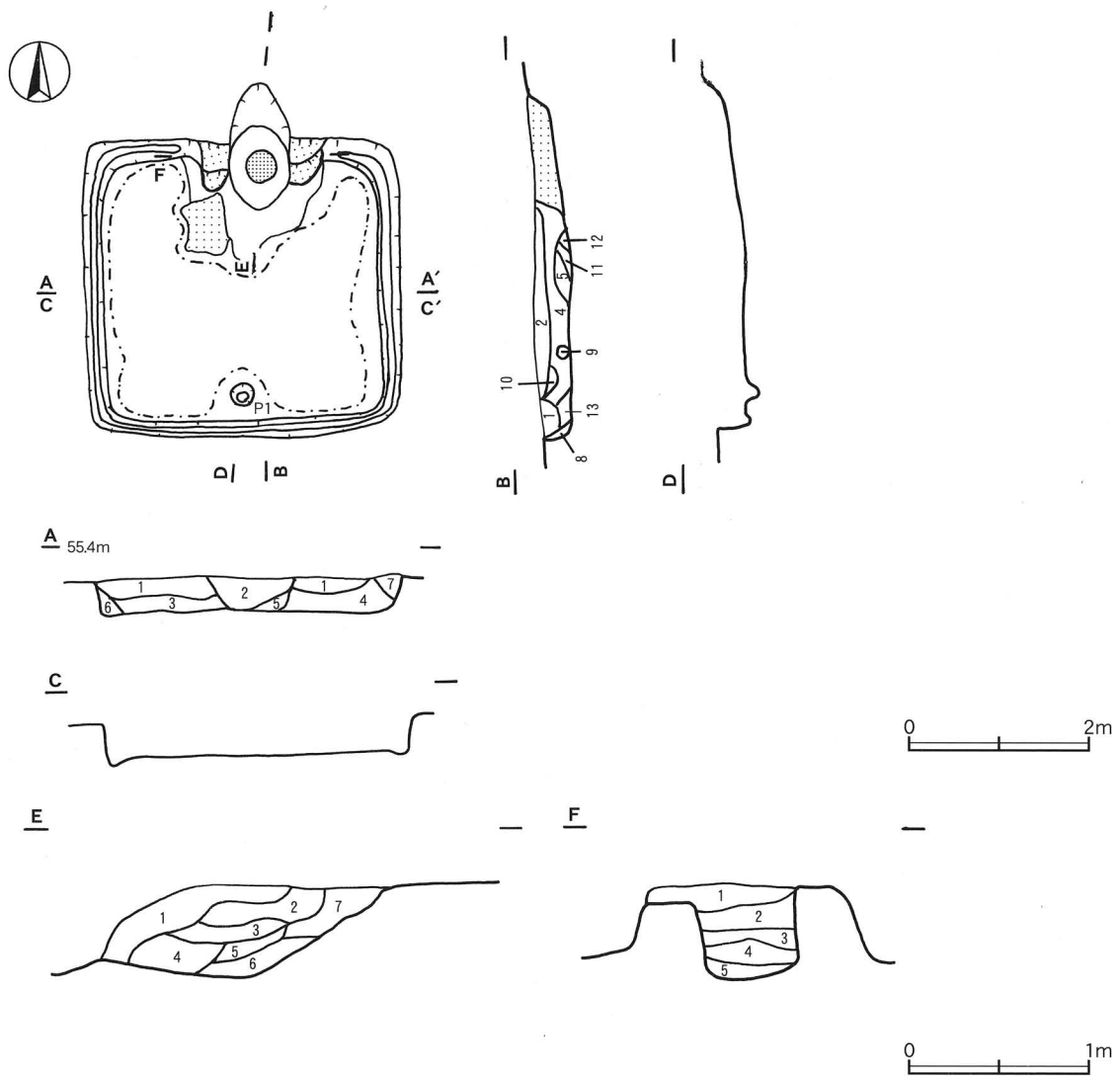
規模と形状 東西2.78m、南北2.62mの方形である。主軸方向は、N-0°である。

壁 ほぼ直立して立ち上がっている。壁高は28cm~31cmである。

床 ほぼ平坦で、竈の手前からよく踏み固められている。壁溝は全体に周回している。竈の手前から中央部にかけての床面には粘土が散在している。

竈 北壁際のやや東寄りに付設されている。規模は、焚口から煙道まで約110cm、両袖部幅約110cmである。袖部は砂質粘土で構築されている。壁外へ55cmほど掘り込んでいる。火床面は10cmほど掘り込み、火熱により赤変している。煙道は火床面から外傾して緩やかに立ち上がっている。

覆土 13層に分層される。ブロック状の堆積状態を示した人為堆積である。全体的に暗褐色土とロームブロックを含む褐色土で構成されている。土の粒子はローム、焼土、炭化物を含み、縮りがある。床面付近の覆土には、微量の粘土が含まれている。



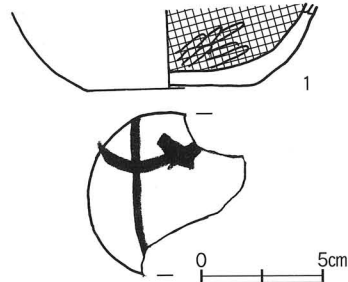
第23図 第10号住居跡実測図

遺物 土師器片38点（甕36点・坏2点）、須恵器片24点（甕9点・坏12点・蓋3点）が出土している。出土遺物はいずれも細片であり、図示できない。底部に「丈」と墨書された第24図1が、覆土中より出土している。

所見 時期は出土した土器から、9世紀中葉のものと考えられる。規模が一辺3m未満で、本遺跡中最も小型の住居跡である。

S I - 10 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・小ブロック少量、焼土粒子・炭化粒微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量
- 3 暗褐色 ローム粒子少量・小ブロック中量、焼土粒子少量、炭化粒微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量・小ブロック微量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 5 暗褐色 ローム粒子・小ブロック・焼土粒子・炭化粒子微量
- 6 褐色 ローム粒子中量・小ブロック少量
- 7 褐色 ローム粒子・小ブロック中量
- 8 暗褐色 ローム粒子微量、焼土ブロック多量
- 9 褐色 ローム粒子少量・小ブロック中量、炭化粒子微量
- 10 褐色 ローム粒子中量・小ブロック少量
- 11 暗褐色 ローム粒子少量・小ブロック微量
- 12 暗褐色 ローム粒子・小ブロック・焼土粒子微量
- 13 暗褐色 ローム粒子・小ブロック・粘土ブロック微量



第24図 第10号住居跡出土遺物実測図

竈土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、小ブロック微量、焼土粒子・ブロック微量
- 2 暗褐色 ローム粒子・小ブロック・焼土粒子・ブロック微量
- 3 暗赤褐色 ローム粒子・小ブロック微量、焼土粒子少量・ブロック中量、炭化物・粒子少量
- 4 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子少量・ブロック微量、炭化粒子微量
- 5 暗赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子中量・ブロック少量、炭化物・粒子微量
- 6 にぶい赤褐色 ローム粒子微量、焼土粒子中量・ブロック少量、炭化物・粒子微量
- 7 暗赤褐色 ローム粒子少量・小ブロック微量、焼土粒子少量・ブロック微量、炭化物・粒子少量

第10号住居跡出土遺物観察表(第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	備考
1	土師器	坏	—	(3.2)	6.7	長石・砂粒	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り・体内内面ヘラミガキ	P1 30%・底部に墨書「丈」 内面黒色処理

第11号住居跡 (第25図)

位置 B区の中央に位置する。

規模と形状 床面が露出した状態で検出したため、壁の立ち上がりが確認できなかった。床面の状態やピットの位置から判断して、N-37°-Eを主軸とする東西4.90m、南北5.70mの長方形を呈すると推定される。

床 ほぼ平坦である。

ピット 1ヶ所。直径30cm、深さは39cmである。竈に正対して位置することから、出入口施設に伴うピットと考えられる。

竈 北壁際中央部に付設されており、赤化した火床面のみである。

覆土 検出できなかった。

所見 床面が露出した状態で検出し、遺物も出土していないため時期等は不明である。

第12号住居跡（第25図）

位置 B区の中央に位置する。

重複関係 本跡南側は第7号住居跡と第8号住居跡が重複している。

規模と形状 床面が露出した状態で検出したため、壁の立ち上がりが確認できなかった。床面の状態や竈残存部の位置から推定して、東西幅は4.65mで、南北幅は約4.5mでN-48°-Eを主軸とする方形を呈していると思われる。

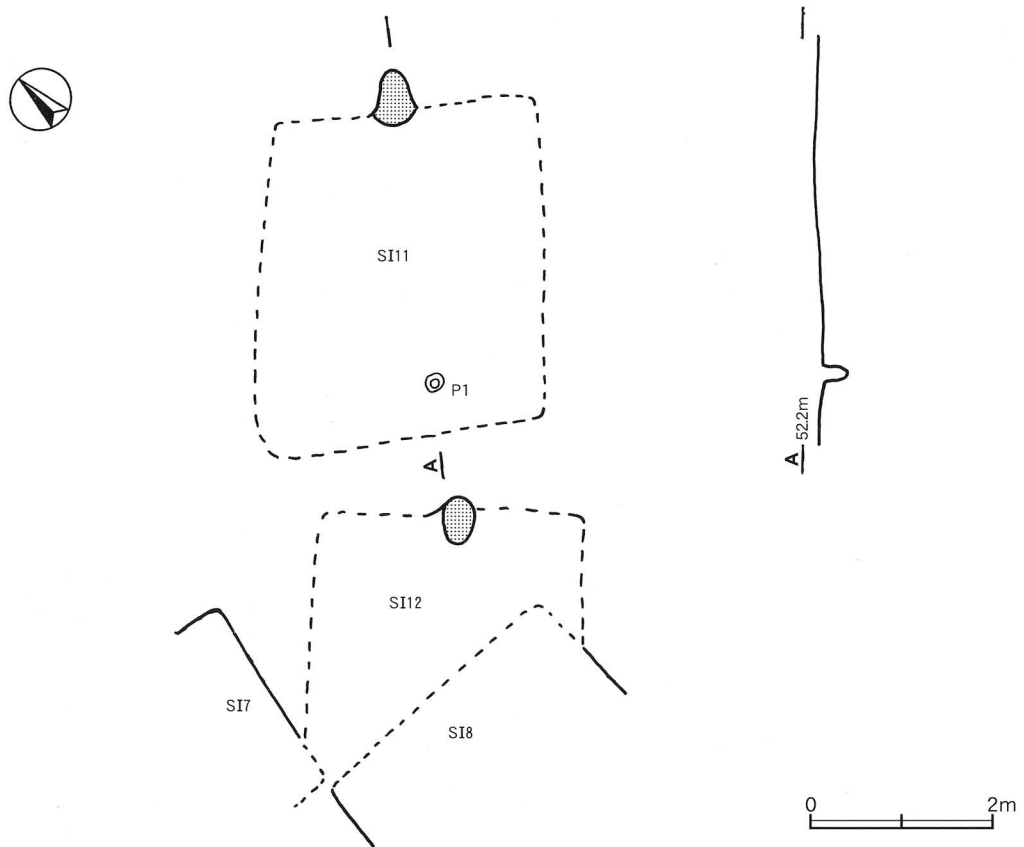
床 ほぼ平坦である。

ピット 確認できなかった。

竈 北壁際中央部に付設されている。赤化した火床面のみが残存している。

覆土 検出できなかった。

所見 床面が露出した状態で検出し、遺物も出土していない。そのため時期の推定は困難で、主軸方向が東に振れていることや、第7号住居跡・第8号住居跡の上面より検出されていることから、今回調査した遺構の中では比較的新しいものと考えられる。



第25図 第11・12号住居跡実測図

(2) 道路跡と溝跡

第1号道路跡 (第26図)

位置 A区の中央に位置する。N-14°-Eである。規模は、幅3.50m、長さ1.50mであり、形状は直線的である。

覆土 一部攪乱を受けているが、2・20層が道路跡で、よく踏み固められている

所見 遺物等は検出できないので、時期不明である。また、南側の道路跡は遺存状態が悪く、湮滅している。

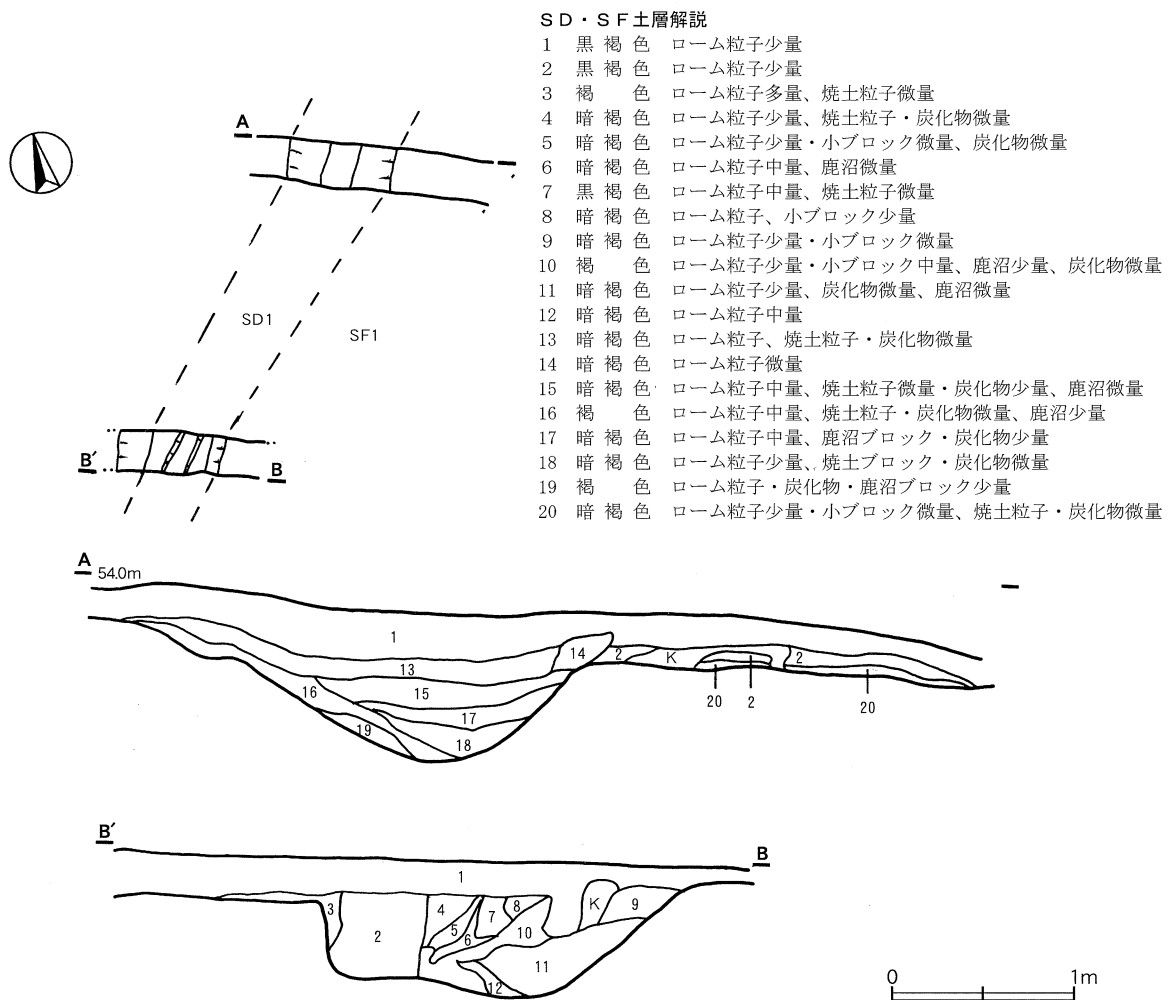
第1号溝跡 (第26図)

位置 A区の中央に位置する。

規模と形状 溝2ヶ所にトレンチを入れて確認した。北側トレンチでは、規模が上幅3.52m、下幅2.10m、長さ1.41m、深さ1.10mである。南側トレンチでは、規模が上幅4.40m、下幅1.0m、長さ1.50m、深さ1.35mである。断面形は、逆台形を呈し、壁高は外傾している。

覆土 北側トレンチは7層に、南側トレンチは12層に分層される。北側トレンチ及び南側トレンチは、全体的に暗褐色土で、ローム、焼土、炭化物、少量の鹿沼を含み、締まりがある。レンズ状の堆積状況を示した自然堆積である。

所見 遺物等は検出できないので、時期不明である。なお、第1号道路跡にそって直線的に掘られている。



第26図 第1号道路跡・第1号溝跡実測図

(3)不明遺構

不明遺構 (第27図)

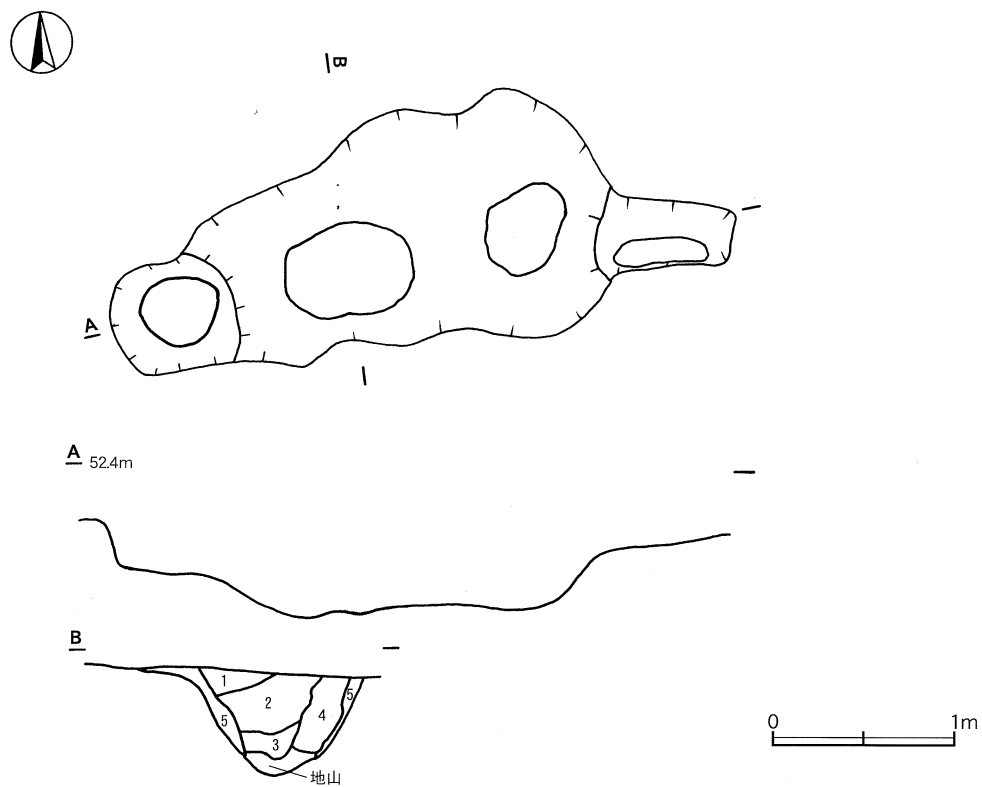
位置 B区の西側に位置する。

規模と形状 長軸5.52m、短軸1.70mの不整楕円形である。最深部の深さは、84cmである。長軸方向はN-86°-Eである。

覆土 5層に分層される。全体的に暗褐色土で、ローム粒子、焼土粒子、炭化物を含み、締りがない。ブロック状の堆積状態を示した人為堆積である。第2層には、微量の貝片が含まれている。

遺物 覆土中から、墨書土器を含む土師器片11点(甕片7点・坏片4点)が出土している。しかし、これらの出土遺物は、攪乱がひどいため本遺構に伴うものかどうか不明である。

所見 時期・性格等は不明である。



第27図 不明遺構実測図

SX-1 土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子・小ブロック・焼土粒子・ブロック・炭化物微量
- 2 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化物・貝片微量
- 3 暗褐色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子微量・ブロック少量
- 5 褐色 ローム粒子中量

第3章 ま と め

今回の調査で、北平遺跡は奈良・平安時代の集落跡であることが確認できた。ここでは、集落の変遷と墨書土器について、調査完了にあたってを述べ、まとめとした。

1. 集落の変遷

北平遺跡は、東側が谷状になっており、西側の台地に集落が形成されている。住居跡の時期は、7世紀後葉に属するのは、第8号住居跡、8世紀後葉に属するのは、第3号住居跡と第7号住居跡、9世紀前葉に属するのは、第1号住居跡と第4号住居跡、9世紀中葉に属するのは、第6号住居跡と第10号住居跡、9世紀後葉に属するのは、第2号住居跡、第5号住居跡である。7世紀中葉以前または10世紀以降の住居跡に関する出土遺物等は確認されていない。住居跡の検出比率から奈良時代に住み始まり、平安時代に拡張されていったことが推定される。10世紀以降の住居が確認されていないのは、この地から移住していった可能性が考えられる。また、各住居跡の規模や形状は、9世紀を境に均一化してくる。

道路跡・溝跡については、出土遺物等は検出できなかったため、時期不明である。地元の人の話から中世以降のものと思われる。

2. 墨書土器について

墨書土器が出土した住居跡を整理してみると、次のようになる。

遺構	釈文	種別	材質	器種	部位	方向	時期	備考
2号住跡	公	墨書	土師器	坏	体部	正位	9c後	P1
	真	墨書	土師器	高台付坏	底部			P3
5号住跡	真	墨書	土師器	坏	体部	横位カ	9c後	P5
	丈	墨書	土師器	坏	体部	横位カ		P6
6号住跡	子	墨書	土師器	坏	体部	左横位	9c中	P7
	真	墨書	土師器	坏	底部			P14
	丈	墨書	須恵器	坏	体部	右横位		P5
	丈	墨書	土師器	坏	体部	右横位		P17
	丈	墨書	土師器	坏	体部	倒位カ		P18
	丈	墨書	土師器	坏	体部	不明		P20
	丈カ	墨書	土師器	坏	体部	不明		P21
	□	墨書	土師器	坏	体部	不明		P19
	□	墨書	土師器	坏	体部	不明		P22
	丈□	墨書	土師器	坏	体部	倒位		P2
□	墨書	土師器	坏	底部		P3		
8号住跡	丈	朱書	土師器	壺	胴部	正位	7c後	P11
10号住跡	丈	墨書	土師器	坏	底部		9c中	P1
表採	□	墨書	土師器	坏	体部	不明		
SX-1	丈	墨書	土師器	坏	体部	倒位		

今回の調査で墨書土器「丈」11点、「真」3点、「公」1点、「子」1点、文字不明3点が出土している。墨書土器の中でも「丈」が特に目立つ。第8号住居跡から出土した土師器壺の「丈」は朱書きで、なんらかの祭祀的な意味があるものと推定される。朱書土器の出土例は、つくば市・中原遺跡¹⁾が挙げられる。墨書土器「丈」の県内の出土例は、大宮町・上村田小中遺跡²⁾、那珂町・森戸遺跡、高森遺跡³⁾、八郷町・半田原遺跡⁴⁾などにみられる。「丈」は、丈部のことであり、氏族名である。丈部は、難波の豪族・阿部氏と密接な関係を持ち、東国に進出し、額田地方を中心に栄えた豪族である⁵⁾。また、東国に横穴墓をもたらしたのも丈部である。『続日本紀』中にも「那賀郡人丈部龍麻呂」とあり、この地方を治めていたことが窺える。墨書土器「真」の出土例は、茨城町・奥谷遺跡⁶⁾、石岡市・茨城廃寺⁷⁾、国分僧寺⁸⁾、土浦市・入ノ上遺跡⁹⁾にみられる。墨書土器「公」については、その文字通りに公的機関、つまり当時律令体制下で地方に置かれた諸官衙に関係するものと思われる。墨書土器「子」の出土例は、石岡市・杉ノ井遺跡¹⁰⁾や、つくば市・熊の山遺跡^{11)～15)}に出土例がある。

北平遺跡の出土遺物は、集落の変遷でも述べたように7世紀以前または10世紀以降の遺物が確認されていない。9世紀中・後葉に属する住居跡から墨書土器「丈」が多く出土しているところから、この地に丈部の血縁または地縁集団が集落を形成していたことが考えられる。また、第8号住居跡出土土師器壺の朱書「丈」と6号住居跡から出土した土師器坏の墨書「丈」との関係は、時間的な空白があり、連続していないことからその関連性については不明である。

今回出土した墨書土器やその他遺物等は、この地の奈良・平安時代の様相を探る上での貴重な手掛かりになるとと思われる。

3. 調査完了にあたって

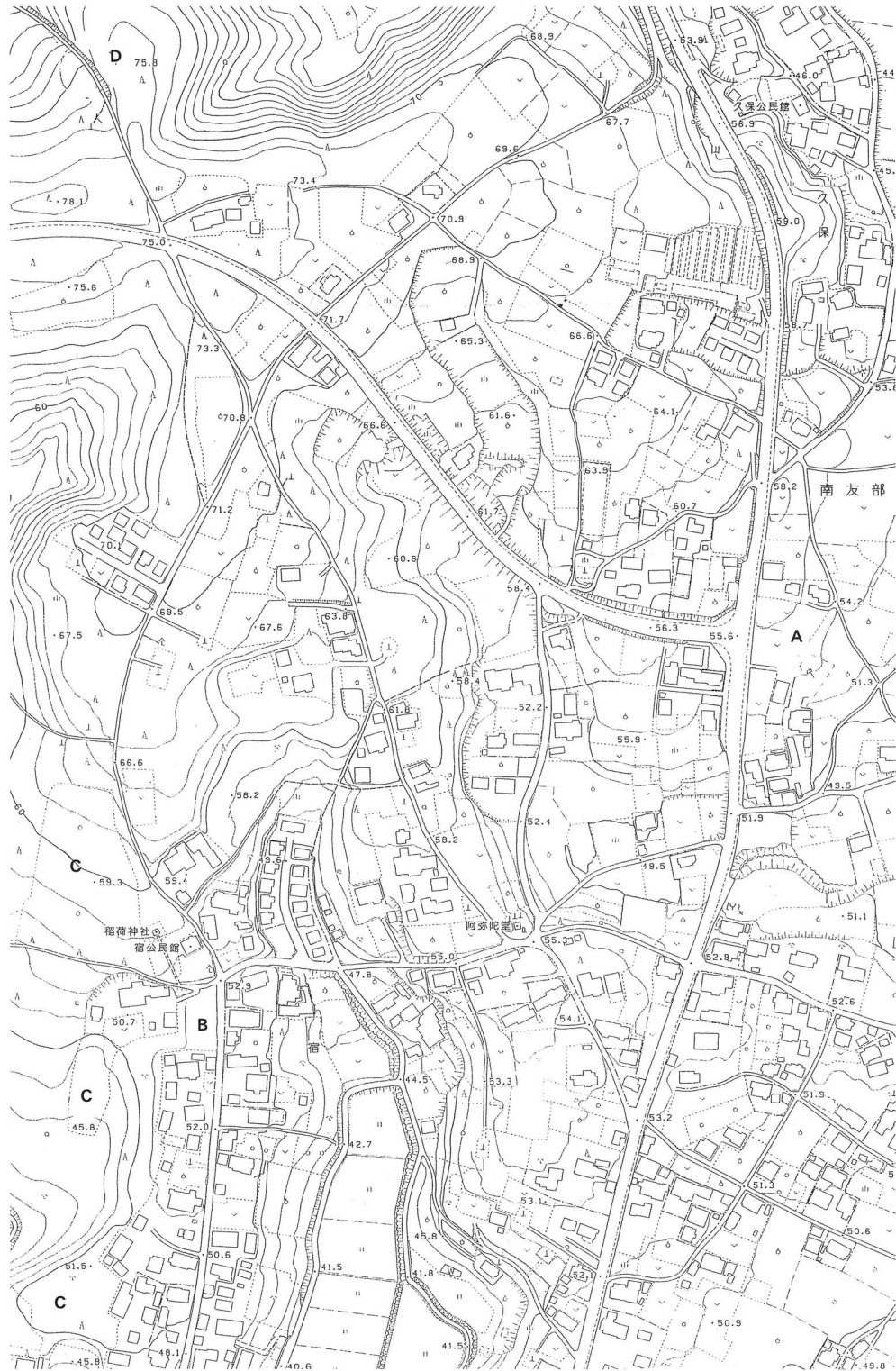
都市計画道「宿・大沢線」は、北部で町道1級1号線及び北山公園の観光道と結ぶ重要路線であるが、教育委員会としては、特に接続地は北平遺跡南面丘陵地であって、文化財保護上重要注意地区にあたると考えていた。しかし路線計画時点では、ここは栗畑で、地表観察はできず、表面観察が可能になるまでは遺跡の有無を判断することはできなかった。路線確定後、栗の木が伐採された。そこで、現地踏査に入ると、ここに土器の散布が見られたことから試掘による確認調査が必要である旨都市計画課に申入れた。都市計画課では、その結果遺跡が所在した場合、この道路の重要性と機能上から計画変更はできないので、記録保存の処置をとられるよう要望があった。教育委員会では、その要望に沿って、記録保存を前提に、遺構分布状況を把握するため、50%ほどの試掘を実施した。その結果、9軒の住居跡と溝状遺構が検出された。都市計画課では、早速発掘調査費を計上し、12月の工事発注に間にあうように調査されるよう更なる要望があった。そこで教育委員会では、確認調査にひきつづき発掘調査に入ることにし、短期間に調査が完了できるよう調査員や調査補助員の確保に協力された。幸いにも技量豊かな調査員や調査補助員を確保でき、更に県教育財団の調査員の方々の適切な指導と応援を得て、綿密で迅速な調査が出来た。また、県教育庁文化課の指導によって、ほぼ全域の表土除去を発掘調査と併行して実施したところ、新たに3軒の住居跡が検出できた。第10号住居跡は、第1・2号住居跡の間に位置し、保存状況は良好であったが、第11・12号住居跡は、住穴跡だけで遺構の形態はなく、遺構と判断していたC区の2号溝は、谷状地形であることが判明する等、開発区域全体について、あまずことなく記録保存できた。調査を支えた友部町教育委員会生涯学習課や調査会各位に調査担当者を代表して敬意を表したい。

付章

1. 「宿」の集落と伝承について

地元では、本遺跡が位置する台地から西へ500mの「宿」が移住した集落との伝承がある。残念ながらこの伝承についての記録は残っていない。

「宿」は「宿場」と同じ整然とした居住地を意味するが、この集落は「宿本通り」と呼ぶ古道両端に位置し、各家々の敷地は、ほぼ同じで、人為的な区画の形態がみられる。またこの集落には、広い耕作地はなく、主たる耕作畑は、本遺跡が位置する台地であって、今もこの地の地権者は「宿」の人々が多い。南友部地区の氏子をもつ神社は、本遺跡の台地北端に



A北平遺跡（発掘現場） B宿の集落 C砂鉄採掘跡 D古山台の砂鉄層露出地

第28図 北平遺跡と「宿」集落位置図

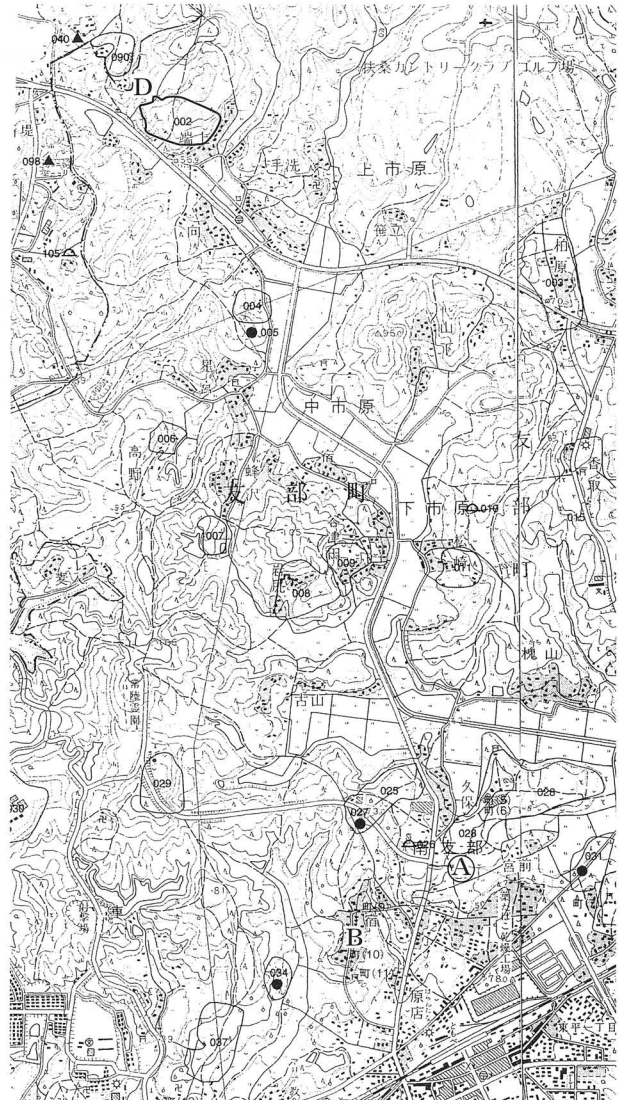
位置する「香取神社」〔天慶二年（939）創建〕である。とりわけ「宿」の人々は崇敬心が厚いという。それは近年神殿改修にあたり、高額寄付金奉納者が多いことからわかる。11月の秋祭りには、発掘調査現場を横断す

る古道を通過して、参詣する習慣がある。これは、昔、宿の人々の居住地が、ここにあったからだという。1100年ほど昔のことが、今も語り継がれ、慣習がひきつがれていることは興味深い。

ではなぜ、移住させられたのであろうか。平安時代の律令制のもとで、支配者は租税をあげる為、良好な耕地を確保するため、北平の台地は耕作地とし、人家は「宿」へと移されたのであろうか。それとも、宿の稲荷神社付近は、昔から砂鉄層が埋蔵していることで知られていたため、これを掘り出すために、移住させられたのであろうか。宿瀬戸山地内の砂鉄は、塚本鋳山の会社によって昭和34年から2年間、古山地区は昭和37年から1年間、多量の砂鉄が採掘された。この会社は、内原町の有賀・谷津・田島でも砂鉄採掘をしていることから友部町から内原町にかけて、砂鉄層があることがわかる。(今も古山台の切り通し道東壁に砂鉄層が露出している) このことは古代から知られていて、砂鉄は古墳出土の太刀や住居跡出土の斧・鎌・刀子などの原料として採掘されたと考えられる。鉄をとり出す「たたら」が、この周辺にあることも考えられる。調査された遺跡から出土した鉄器類は、この地域から採掘した砂鉄が原料であったと考えるのが自然であろう。また、「丈部」の氏族はこの砂鉄を求めてこの台地に進出して来たとも考えられよう。

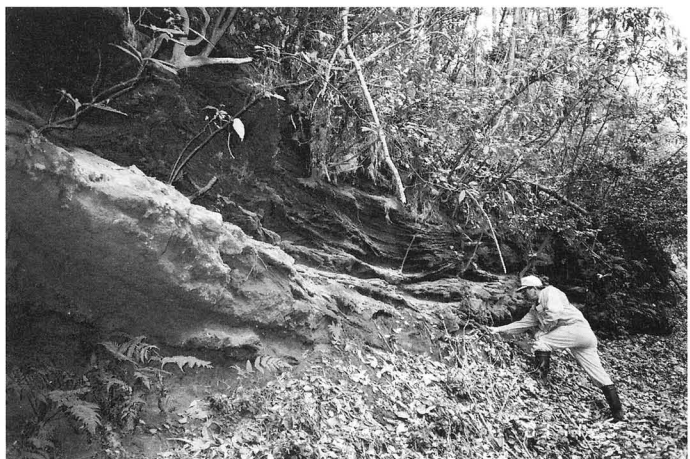
2. 須恵器窯跡について

北平遺跡から、多くの須恵器が出土しているため、友部町史で調べてみると、「上市原の国道50号線に沿う民家内でNo.002端上遺跡の西端に窯跡が発見された。この窯跡の北側台地斜面に笠間市大淵窯跡があり、この中間台地上には夥しい須恵器片が散乱していることからこの付近一帯に窯跡があると推測される」とある。本遺跡は、この窯跡まで3kmほどで、木葉下窯跡より近いことから、この窯跡から本遺跡出土の須恵器は供給されたと考えるのが妥当であろう。今後、この窯跡の調査によって、北平遺跡や小原地内の遺跡との関連が解明されることが期待される。



A北平遺跡（発掘現場） B宿の集落
D須恵器窯跡（002 端上遺跡・040 笠間大淵窯跡）

第29図 北平遺跡と須恵器窯跡位置図



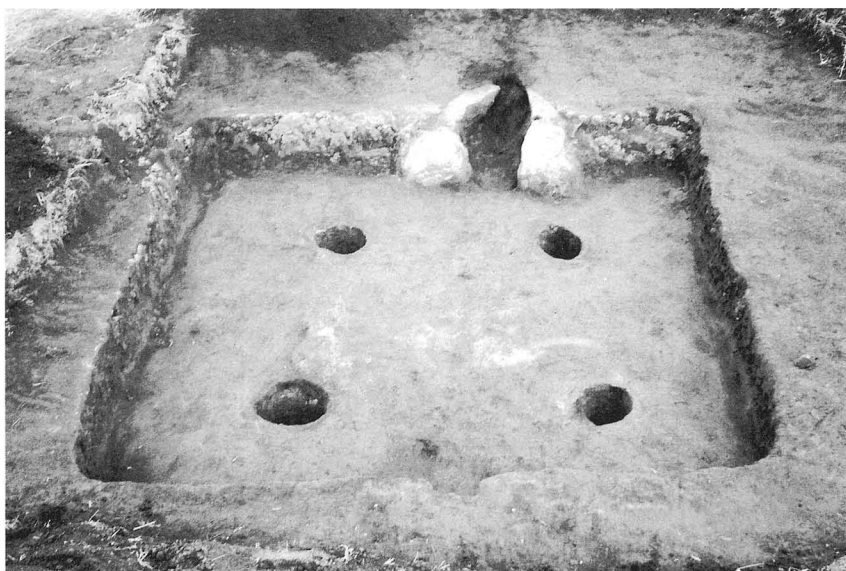
古山台の砂鉄層

註

- 1) 成島一也「中根・金田台地特定土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－中原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』155集 2000年
- 2) 大宮町歴史民族資料館編『大宮の考古遺物』1995.10
- 3) 那珂町史編纂委員会『那珂町史 自然環境・原始古代編』1988.3
- 4) 仙波 亨「一般県道石岡つくば線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』122集 1996.3
- 5) 那珂町史編纂委員会『那珂町の考古学』1989.1
- 6) 鯉淵和彦「一般国道6号改築工事地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』50集 1988.3
- 7) 小笠原義良彦ほか『茨城廃寺』Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ 石岡市教育委員会 1980～82年
- 8) 西宮一男『常陸国分尼寺址調査報告（第一次調査）』石岡市教育委員会 1970.3
- 9) 窪田恵一ほか『入ノ上遺跡－都市計画道路田村・沖宿線道路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書一』土浦市教育委員会 1997.8
- 10) 土生朗治『泉台遺跡－発掘調査報告書一』石岡市教育委員会
- 11) 新井聡ほか「(仮称) 島名・福田坪地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ－熊の山遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告書』第120集) 1997年
- 12) 小島敏「(仮称) 島名・福田坪地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ－熊の山遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告書』第133集) 1988年
- 13) 吉原作平「(仮称) 島名・福田坪地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅲ－熊の山遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告書』第149集) 1999年
- 14) 矢ノ倉正男ほか「(仮称) 島名・福田坪地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅳ－熊の山遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告書』第166集) 2000年
- 15) 藤田哲也ほか「(仮称) 島名・福田坪地区土地地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ－熊の山遺跡」(『茨城県教育財団文化財調査報告書』第174集) 2001年
- 16) 『友部町史』友部町 1990年
- 17) 『友部百年史』友部町・友部町商工会 1971年

版 圖 真 寫

跡 遺 平 北



第1号住居跡
完掘状況



第1号住居跡
遺物出土状況



第1号住居跡
竈完掘状況

第2号住居跡
第10号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
完掘状況



第3号住居跡
遺物出土状況





第3号住居跡竈
遺物出土状況



第3号住居跡
完掘状況



第5号住居跡
完掘状況

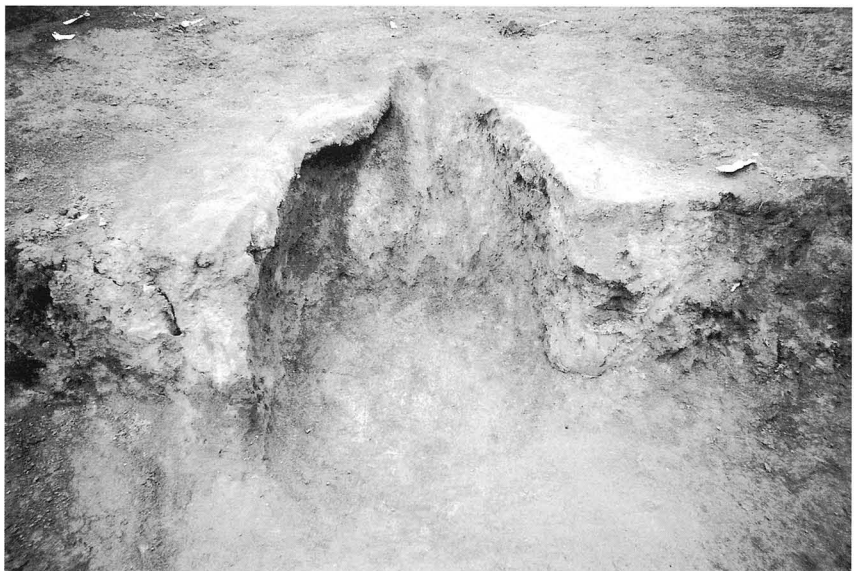
第5号住居跡竈
完掘状況

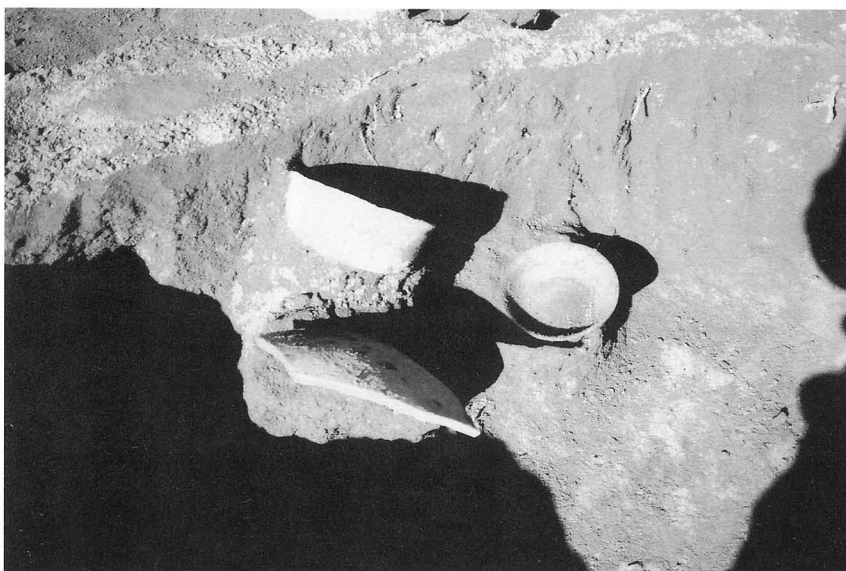


第6号住居跡
完掘状況

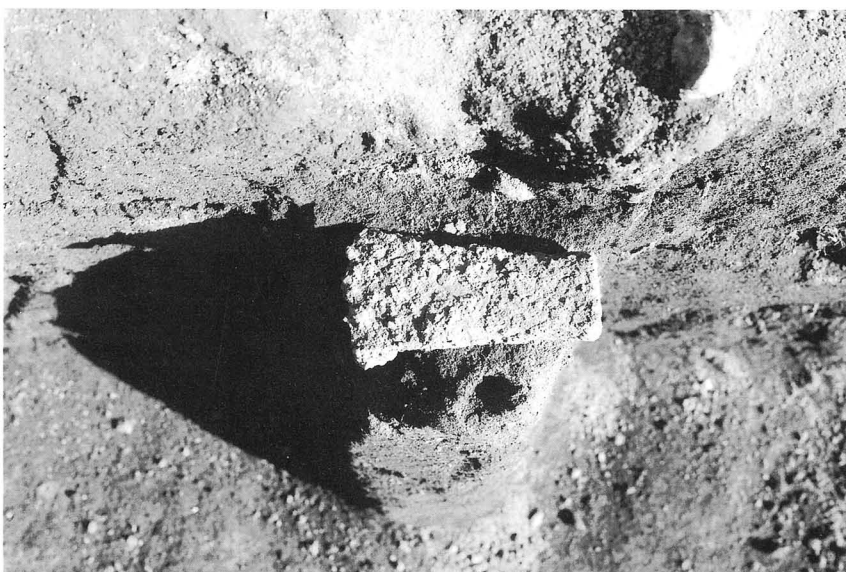


第6号住居跡竈
完掘状況





第 6 号住居跡
遺物出土状況



第 6 号住居跡
鉄斧出土状況



第 7 号住居跡
炭化材・遺物出土状況



第7号住居跡竈
遺物出土状況



第7号住居跡
完掘状況



第8号住居跡
遺物出土状況



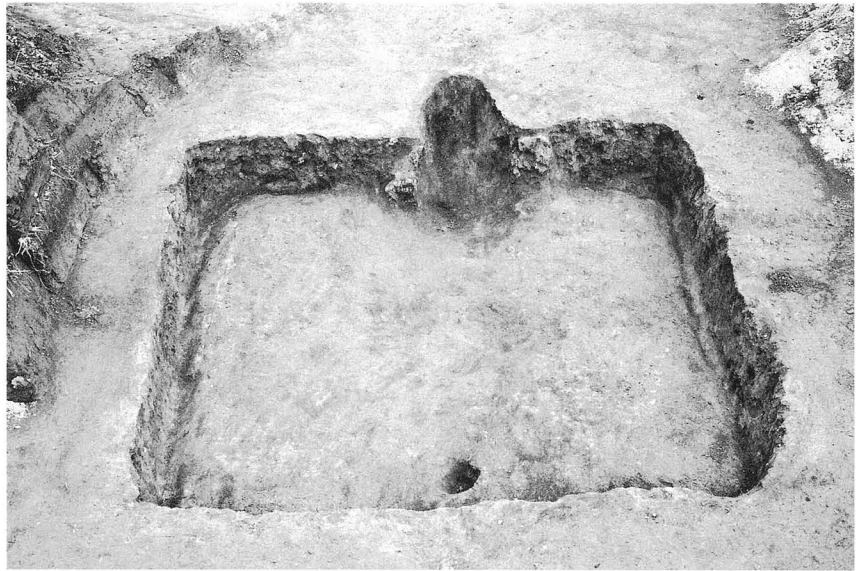
第8号住居跡竈
完掘状況



第8号住居跡
完掘状況



第9号住居跡
完掘状況



第10号住居跡
完掘狀況



第11・12号住居跡
完掘狀況



第1号溝跡
土層断面図



SI 1-1



SI 1-2



SI 1-4



SI 1-5



SI 1-8



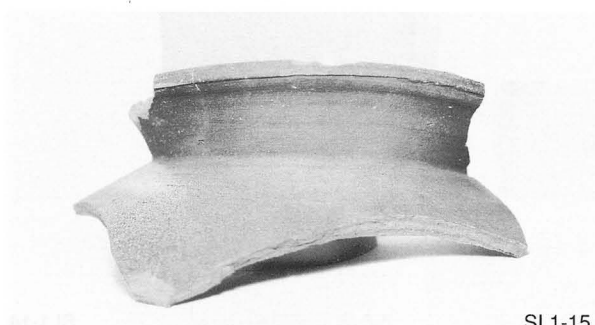
SI 1-18



SI 1-11



SI 1-16

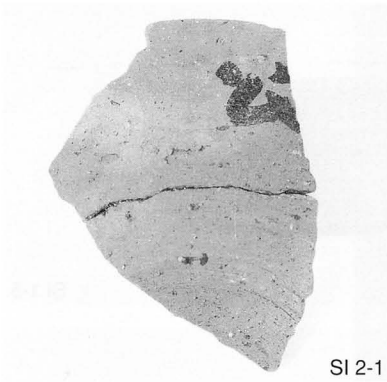


SI 1-15



SI 1-12

PL10



第1～3号住居跡出土遺物



SI 4-3



SI 4-2



SI 4-1



SI 5-1



SI 5-2



SI 5-3



SI 5-4



SI 5-8



SI 5-5



SI 5-6



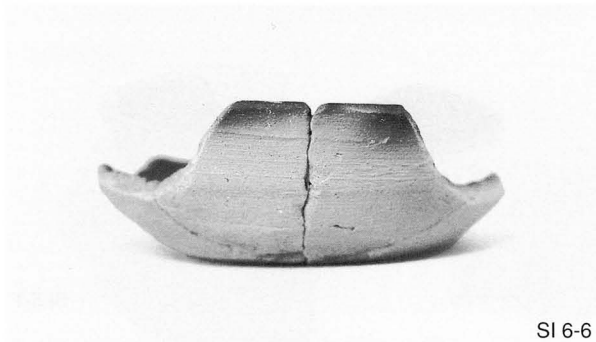
SI 5-7



SI 6-2



SI 6-4



SI 6-6



SI 6-9



SI 6-8



SI 6-10



SI 6-11



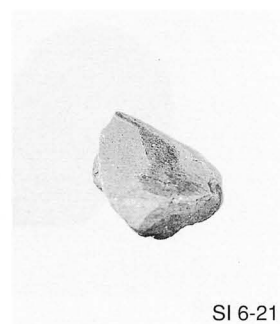
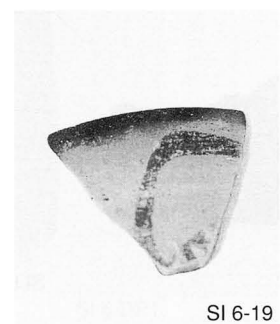
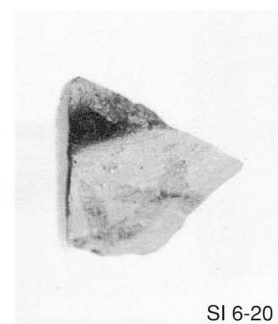
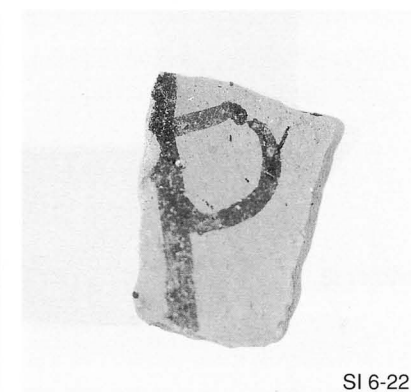
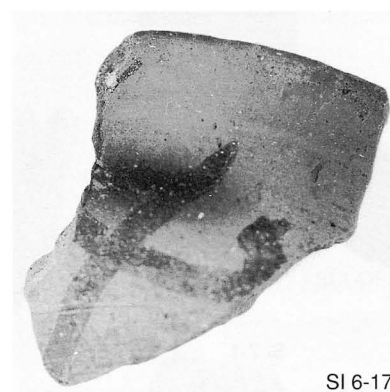
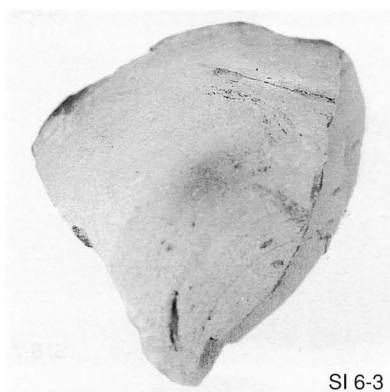
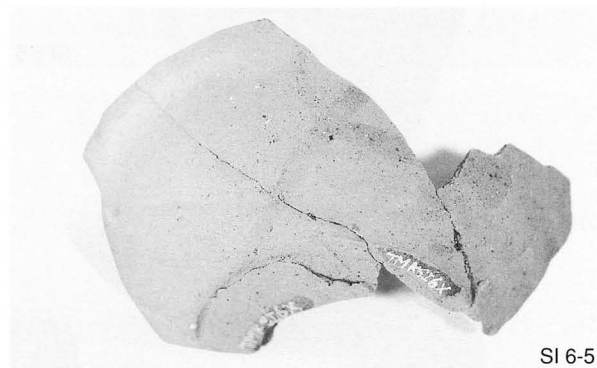
SI 6-15



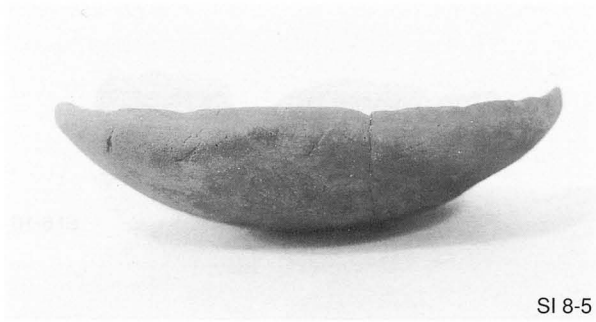
SI 6-1



SI 6-13



PL14



SI 8-5



SI 8-1



SI 8-4



SI 8-6



SI 7-1



SI 8-7



SI 8-8



SI 8-3



SI 8-11



第7・8号住居跡出土遺物



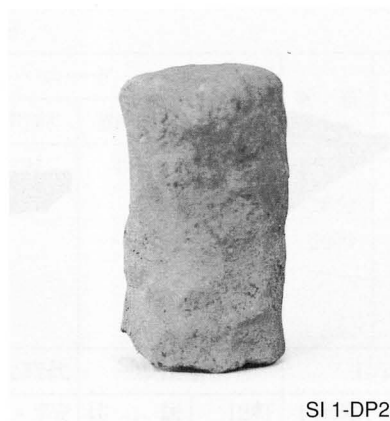
SI 8-9



SI 8-10



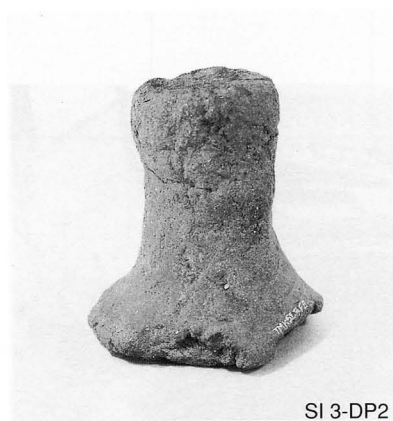
SI 1-DP1



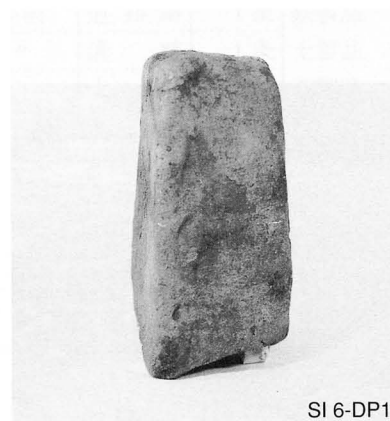
SI 1-DP2



SI 13-DP1



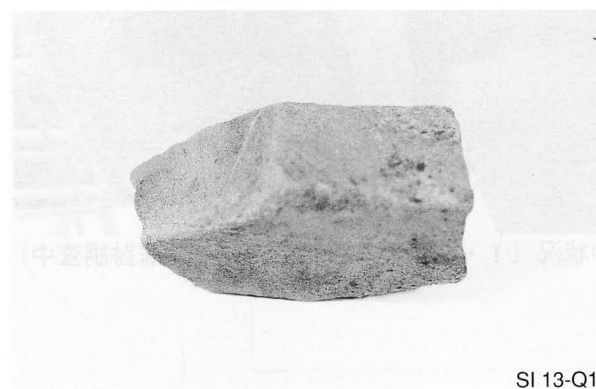
SI 3-DP2



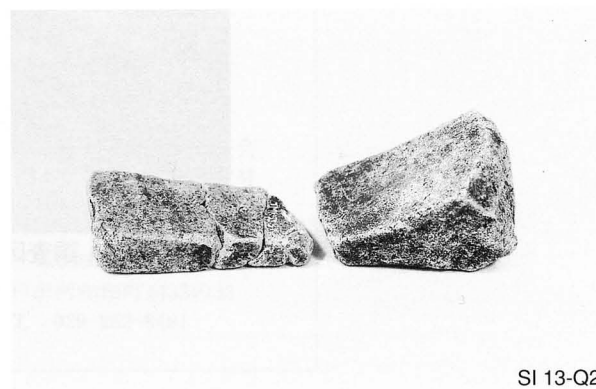
SI 6-DP1



SI 13-DP3



SI 13-Q1



SI 13-Q2

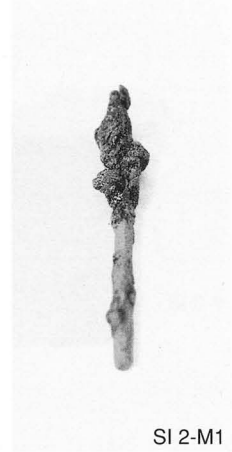
PL16



SI 1-M1



SI 3-M2



SI 2-M1



SI 6-M1



SI 6-M2



SI 3-M1

第1～3・6号住居跡出土遺物



A 調査区の状況 (1・2号住居跡完掘、10号住居跡調査中)

報告書抄録

ふりがな	きた たいら い せき							
書名	北平遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	能島 清光 山口 憲一 高橋 孝之							
編集機関	友部町北平遺跡発掘調査会							
所在地	友部町中央三丁目3番6号							
発行機関	友部町北平遺跡発掘調査会							
発行年月日	2004(平成16)年3月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きた たいら い せき 北平遺跡	いばらきけん にしいばらきぐん 茨城県西茨城郡 ともべまち みなみともべ 友部町南友部99 外	8321	028	36度 21分 19秒	140度 18分 29秒	2004年 11月12日 ～ 2004年 11月28日	3,600m ²	都市計画道 「宿・大沢線」 建設に伴う 埋蔵文化財 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構		主な遺物		特記事項	
北平遺跡	集落	奈良・平安	住居	12軒	土師器、須恵器		墨書土器 19点	
		不明	道路跡	1条	鉄製品			
		〃	溝跡	1条	土製品			
		〃	土坑	1基	石製品			

北平遺跡

平成16年3月1日

発行 友部町北平遺跡発掘調査会
友部町中央三丁目3番6号
TEL 0296-77-1101

印刷 山三印刷株式会社
水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481

